昭和46年12月19日発行通巻41号(毎日曜日発行). 昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

朝日=ラルース

12/19
220円
41

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

総監修
岡田　要　日本学士院会員
末廣　恭雄　東京大学名誉教授
古川　晴男　前東京学芸大学教授
宮地伝三郎　京都大学名誉教授
山階　芳麿　山階鳥類研究所理事長

編集委員
阿部　宗明　農林省東海区水産研究所技官
上野　俊一　国立科学博物館研究官
浦本　昌紀　山階鳥類研究所員
小原　秀雄　女子栄養大学教授
日高　敏隆　東京農工大学教授
堀越　増興　東京大学総合研究資料館助教授

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(２)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第１号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

目　次

世界動物百科　第41号

カラーページ

監修　野村晋一（東京大学教授）
翻訳　内田雄一（早稲田大学高等学院仏語講師）

私たちの仲間

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注１〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，１部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島３－３　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄１－３－３　〒460　TEL052－231－8131

次号予告

12月15日発売



世界動物百科
42号　12／26

カラーページ

奇蹄目　ウマ科　ウマ属（つづき）

ロバ
アジアノロバ，モウコノロバ，チベットノロバ
インドノロバ，ペルシャノロバ，アフリカノロバ
ヌビアノロバ，ソマリノロバ，ロバ（飼育種）
ラバとケッティ

シマウマ
グレビーシマウマ，ヤマシマウマ，バーチェルシマウマ

私たちの仲間

ウマと共に　畑　正憲

絶滅寸前の野生ロバ　増井光子
カラーページ解説

芸道一筋のタレント馬　編集部

雄々しいカモシカ　串田孫一
山路でのであい　4

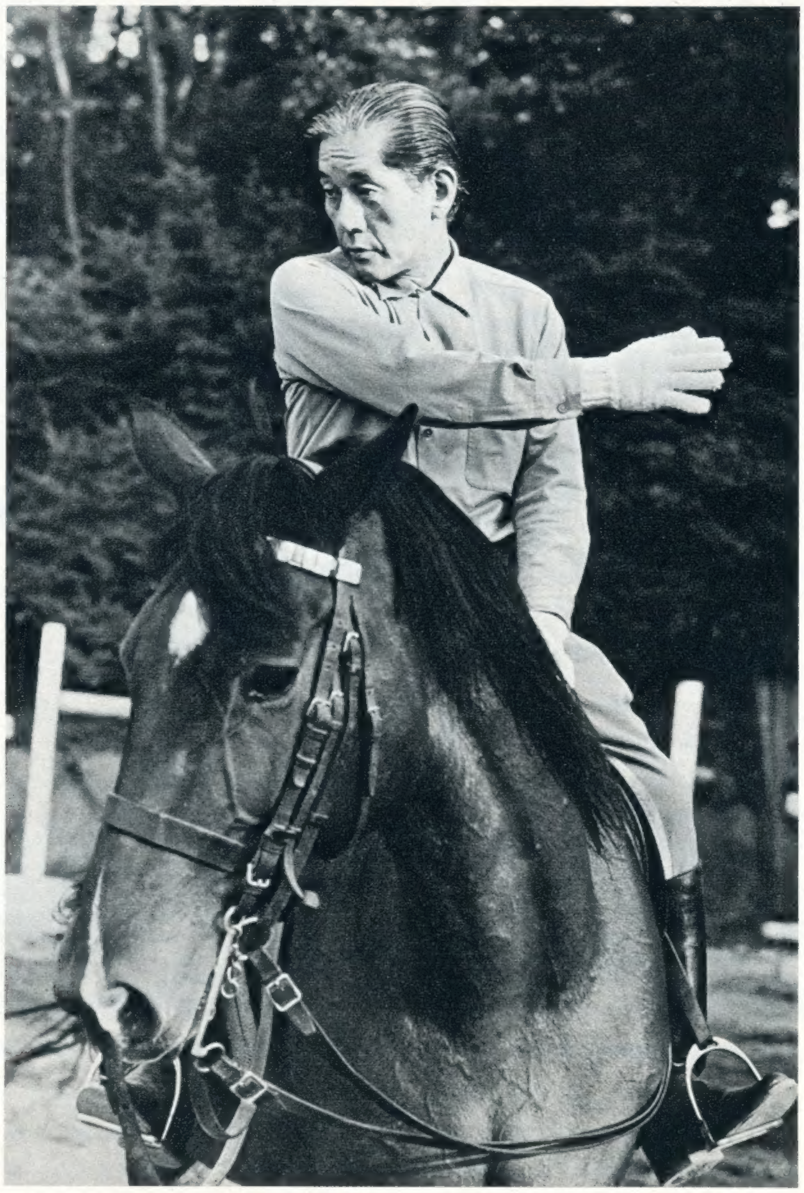
飼育自慢　9（最終回）
ナキウサギ〈おびひろ動物園〉

©1971 ASAHI SHIMBUN, Tokyo, pour la langue japonaise・Librairie LAROUSSE, Paris・RIZZOLI EDITORE, Milan.

私たちの仲間
41号…12月19日

乗馬歴

木下順二



いかにもだれかを教えてるみたいだが
（1971年10月，東京乗馬倶楽部で）　撮影　原　彪

わが乗馬歴を書けということになったが，乗り始めたのが1930年代の半ば，つまり30何年前というだけのことであって，乗馬歴などとことごとしく呼ばれていいものはなんにもない。ただ，馬というあの愛すべき動物を，近頃の子供たち（や大人ども）は，身近なものに感じなくなっているらしいということが，われら馬好きにとってはいかにも残念である。テレビや映画に姿は見せても，馬の実物は競馬場と乗馬クラブ以外にほとんど存在しなくなったのだから仕方がないのだけれども，いや，仕方がないのであるから，せめてわが貧弱な乗馬歴を材料にして，馬に対する親近感を，少しでも多くの人々に，少しでも多く持ってもらいたいと考える，というのがことの始まりである。私が馬に乗ることを初めて正式に教わったのは，旧制高校1年生の馬術部員としてであった。中学では私は水泳部のキャプテンでブレストをやっていたが，日本女子記録にどうしてもかなわなかったというのが，高校で馬術部に乗り替えた理由であったような気がする。もっとも日本女子記録といっても，3年後にベルリン・オリンピックのブレストでは，前畑嬢が世界一になった頃のわけだから，たぶん私は前畑嬢にかなわなかったということなのであり，だとすればやむを得ない。

*

えらく謙譲な書き出しになってしまったが，だが実は，大体趣味や道楽というものは，それ自体が楽しみであることのほかに，自分の腕前をいくら自慢しても構わないという楽しみが伴っているはずである。その趣旨にのっとっていうならば，私は高校の馬術部にはいるや，たちまち上達してキャプテンになってしまった。九州大会の範囲でなら，馬場馬術と障害競技の両方で何度もカップや優勝旗をもらい，それらを並べていばっている写真が今でも残っているし，インターハイは東京陸大の馬場で催されたと記憶するが，3人のティームの1人が病気になって，補欠を入れたお蔭で，たしか団体3位にとどまったけれども，それでもつまり第3位ではあった。現在の私は10年来参宮橋の東京乗馬倶楽部へ通っていて，といっても忙しいので月に2度も行ければいいほうだが，ほかの人たちがみんなあんまりうまいので小さくなって乗っているにつけても，馬術に段位がないのが残念である。高等学校の頃，柔道や剣道で3段を取る友人が何人かいた。彼らのあの程度の柔道や剣道が3段なら，おれの馬術も3段ぐらいはあるぞと思ったものだ。馬術3段ということに，もしその頃なっていれば，今は小さくなっておとなしく乗っているにしても，とにかく3段ではあるということでいばれるのにと，残念である。もっとも，段位がないからこそ馬術では，自分の技倆についていくらでもホラが吹けるという説もあることはあるが（故遊佐幸平氏によると，それがすなわち〝高等馬術〟ではない〝口頭馬術〟なのである）。

戦前の旧制高等学校というものは，あちこちの懐旧談などでよく語られるように，たしかに相当のんびりとした3年間であった。また私の頃は，戦時体制にはいる数年まえで，時代そのものもある程度のんびりしていた。騎兵の下士官あがりのおっさんが貸馬屋をやっているのから1頭借りて，市内――というのは熊本市内のことだが――を勝手に駆けまわって帰ってくると，1時間の借り賃が40銭，鞍下に汗をかかせていると50銭であった。馬に乗れない五高生が弊衣破帽に下駄をはいてやって来て，はだしになってやっと跨り，貸馬屋のおっさんが尻をひっぱたいて送りだしてやると，やがて10分もしたころ，馬だけがトコトコ帰ってくるというような風景もよくあった。

馬術部としての練習は，軍隊へ行くよりほかなかった。わが馬術部が通うのはどういうわけか野砲隊で，大砲を引っぱるのが専門の抱きのふとい重ったるい馬にばかり乗っていたから，競技の時に騎兵隊の軽快な馬をあてがわれると少々勝手がちがい，しかし結果としてはそのことが有利であったといえるのかもしれない。土，日の練習日は特進の（というのは下士官から叩きあげの）中尉どのが教官で，実に巧妙ないいまわしでユーモラスにわれわれを罵倒してやまず，そして稀にはまた実にうまくおだてあげてくれた。初めの頃，おっかないので馬上で手綱を握りしめて縮こまっていると〝猿が御幣持ったような格好するな！〟とやられ，馬背に揺られてあぶみが危っかしく靴の爪先までずれてくると〝何だその突っかけ草履は！〟とどなられ，やがて障害が飛べるようになって，高い障害はバーを落としたのが分るが，低いのはそれが分らないからつい気になってちらりとふり返るのへ間髪を入れず，〝いたちがチョロ見するような真似をするな！〟とどなりつけられる。一度私の馬が尻で跳ねたら，私はぴんと張った手綱をそのまま半径に，円を描いてすとんと前に落ちたのを，〝ようし。よく乗るものはよく落ちる！〟と，あとで考えたらよく意味の分らない誉めかたをされたのは，私が落ちてもラッパではない手綱を握って放さなかったからだろう。

なにしろ教官はいかにも乗り心地のよさそうな〝将校鞍〟に乗っているのに，こちらは武骨な〝兵隊鞍〟からあぶみを取っ払ってしまったのにいきなり跨らせられて，馬場の中をぐるぐるぐるぐるまわらせられる。常歩なら何ということもないが，速歩になるとどしんどしんと鞍の上で踊るこちらの尻の重心がちょっと左にずれる。しまったと思ってなおそう

とすると，右にもっと大きくずれてしまう。それをなおそうとすると，もっと大きく左へずれてしまい，そうしているうちにだんだんずるずると，一向に止ってくれない馬の横へずり落ちてしまうのを〝こぼれる〟といった。駈歩になってくると，もっと景気よくすとんと文字通り落ちるようになる。そのとき手綱を放して馬を逃がそうものなら，それこそ〝兵隊なみに〟どなりつけられたものだ。

というような次第を土，日と2日間続けると，月曜にはいつもへっぴり腰で登校しなければならなかったし，夏の合宿などということになれば，3日目には膝の内側から血が流れだし，毎日匍うようにして厩舎へ行って，自分で鞍を置いてやっと乗ると，勢いのいい若い教官がいきなり練兵場の外れの不整地か何かへ引き連れて行って，馬上のこちらからすれば鵯越かと見まがう急坂を，あぶみは鞍の上にあげたまま，つまりあぶみをはかないまんまで駆け降りさせられたりしたものだ。

今の乗馬クラブでは，初心者にはおとなしいこと木馬のような馬を当てがって，むろんあぶみをはかせて，調馬索という長い綱を持った厩務員さんが，ぐるぐる馬を追いまわしながら親切に教えてくれる。以上はだから，そのかみの昔話ということになるのだが。



わたしがいかにも，高等馬術のピルーエットをやっているかに誤解される写真である　（提供　講談社）

しかしまたその頃の秋の遠乗会は，常に愉快な思い出を伴っている。漱石の『草枕』で有名な小天へ行けば，名物の，胡桃を少し大きくしたくらいの小天蜜柑は，ちょうど馬上のわれらの眼の高さに群ってなっていて，いくらでもポケットに詰めこむことができた。黒石原というところにある有名な種畜場へは毎秋全校生が遠足をし，馬術部員は得々と馬で参加して，腹一杯に豚汁を食うのが行事であった。ある年，馬術部顧問の数学のS先生も加わった黒石原の遠乗で，豚汁で大いに騒いでいるあいだ，馬は銜を外して頭絡という綱で木につないであったわけだが，それをS先生は――ずいぶんのんきな（実は無知な）馬術部顧問もあったものだ――木からほどいてそのまま乗ったらしい。走りだした馬をとめようがなくて，仰天して口をあいたまんまのS先生を乗せて馬は突っ走り，そのうち道ばたの立樹の小枝がS先生の口の中に突入するという事態になった。学生が2騎で追っかけて，やっとつかまえたという現場は私は見なかったが，かかる事件を愉快な思い出の中にかぞえることの不謹慎は重々承知だけれども，S先生は次の日から欠席もせず，しかし数日のあいだ，ご自分の数学の時間には一切口を開かないで，黒板に数式ばかり書いておられた。

競技となると，これは昔も今もだが，どんなどしゃ降りでも決行する。久留米で一度，猛烈な雨の中で障害競技に出場した。下は一面お汁粉のごとく，それでも大過なく飛んで行って一番最後の高い障害の前で，そのお汁粉の中へ人馬顚倒という仕儀になった。今でも右脚が馬体の下敷きになった時の感覚を不思議に覚えているが，しかし馬を引き起こし，馬背に匍いずりあがって，とにかくその障害を飛んだ。考えてみると，われながら昔は元気だったものだ。

＊

さて以上，とりとめないような乗馬の思い出を書いたのは，とりとめないようにのんびりとしていた旧制高校のころに，事実そういうとりとめない乗りかたを私がしていたからである。そしてそれがとりとめない乗りかたであったということが私に分って来たのは，やっとここ10年来，東京乗馬倶楽部に通いだしてからのことである。

その前に，あの高等学校時代から飛んで東京乗馬倶楽部へ来るまでの間の〝乗馬歴〟をいうと，そこに乗馬歴はなんにもないのである。大学で馬術部にはいらなかったのは，あるいは大いに勉強をしましょうと考えたからかという疑いもないではないが，それよりも〝馬術〟というものの意味や本当の面白さを，あのとりとめもない乗りかたの中で，私が一向に感得していなかったからだと思う。農学部獣医学科所有の頼りない馬に，時々乗せて貰うぐらいのことであった。大学を出て，軍隊は騎兵の現役だったが，これは――いつかどこかにその時のことを書いたが――忍術を使って〝即日帰郷〟になった。もう一度応召の赤紙が来たが，その時も同様忍術で〝即日帰郷〟に成功した。あとは戦中，蔵書を疎開させていた農家の裸馬に乗ってまわったくらいのことであった。

そしてここ10年来，また馬に乗りだしたきっかけは，4年続きの猛烈な不眠症に苦しんだとき，あらゆる療法を試みたうちの1つに運動としての乗馬があったということに過ぎず，それが利いたというより，ちょうど不眠がなおりだした頃から乗り始めたということだったかと思うが，不眠症は一応後退して馬だけがうまく残った結果になったものの，とにかくそういうわけで，私はただ無念無想で馬場の中を駈けまわっていた。

つまりここでも再びとりとめない乗りかたをしていたわけで，これが東京ではない野外騎乗のできる土地だったら，散歩に見合う自家製用語で〝散乗〟と呼ぶところ，専門用語でもっともらしくいえば〝逍遙騎乗〟ということになるか。

が，そのとりとめない乗りかたのとりとめなさに一撃を加えて，ほとんど眼からうろこの落ちる思いを私に与えてくれるきっかけが私に到来した。最初のきっかけは，実におそまきながら東京乗馬倶楽部へ通いだしてしばらくのあたりで読んだ『遊佐馬術』であり，次にその痛棒の一撃を一瞬の一撃に終らせずに私の頭上へ加え続けている私の師匠――と呼ぶのはこちらが弟子の名に値いしないから気がひけるが――東京乗馬倶楽部の指導者にして本年68歳の名馬術家，小松崎新吉郎氏である。まず『遊佐馬術』について，1965年に「朝日新聞」の〝一冊の本〟というエッセイで私がしるした感想の一部を引くことをおゆるし願いたい。

＊

〝遊佐幸平著『遊佐馬術』とその続編は，形は2冊に分かれているが，馬術というものの意味と面白さを徹底的に語りぬいて一貫しているという点から，これを1冊の本と見ることが可能だし，それにこの2冊は，そもそもある1冊の本をもとにして，1940年と1943年に遊佐氏が行われた一連の連続講義である。当時も戦後も，2冊本として遊佐会から刊行されている。（が，現在は第一出版ＫＫの1冊本〔定価1200円〕としてまとめられている。――後注）

〝そのもとの本というのは，イギリスに生れてフランスでその仕事を完成した稀世の名馬術家ジェイムズ・フィリスが，1頭の馬を調教した17カ月間の日誌であって，この『調教日誌』をもとに遊佐氏が，馬と馬術に関する遊佐氏自身の驚くべく豊富な体験と知識を縦横無尽，天衣無縫に語ったものが，『遊佐馬術』とその続編である。そこでまず私には，1冊の本――この場合はフィリスの『調教日誌』――が，これほど深くこれほど自由に読みこなされているという例は，きわめて稀だと思われる。しかも遊佐氏は，その読みこなしの上に思想としての――哲学としてのといってもいいかと思うが――ご自分の「馬術」を，いくらでもわき出てくる泉のごとくに展開していられる。フィリスのことばを遊佐氏は「全く名僧の提唱を聴き，聖賢の遺訓を読む様な気持を持って」味わうといっていられるが，私にはここに語られている遊佐氏の一語一語そのものが，まさにそのようなひびきを放つことばであると受けとられるのである。

〝スペースがないから，あるいはあればたぶんますます，この本の豊潤かつ芳醇な内容を伝えることに私ははなはだ困難を感じないわけにいかないのだが，きわめて専門的に技術的な，そして合理的でありつつしばしば芸術的な講述の合間には，「羽化登仙」というようなことばも出没する。「馬術というものは」と遊佐氏は，フィリスのことばを借りつつ，ご自分のことばとして語るのであ



弁慶号に乗る小松崎先生
同じウマに
わたしが乗った姿と
比較できないのが
残念である
撮影　原　彪

る。「馬を軽快に歩かして，その軽快に歩いて来たところの推進勢力を，今度はそれを自分の拳に受けて，馬が自縄自縛になるようにする」――そのとき自分の両拳の中には，馬体の450キロと人間の重さがそっくり納まり，実は全地球が，全宇宙が納まって羽化登仙の恍惚境がそこに現出されるのだというようなくだりは，「散乗」ばかり続けている私とすれば，本を伏せ目をつぶって想像力の中で遙かに望見するよりほかない。続編の終章は，世阿弥や兼好法師や芭蕉の理解にささげられている。

（中略）

〝私にはフィリスの叙述の足りぬところを，遊佐氏が懸命に擁護し正当化しようとしている個所がまた面白く，かと思うと時に遊佐氏が，あるいはフィリスに嫉妬しているのではないかと感じられる個所さえないではない。

〝それにしても，それほど遊佐氏がその馬術に傾倒したフィリスが，生涯の延べ騎乗数おそらく15万頭以上，死の３日まえまで騎乗を断たずに79歳で昇天したのは1913年であり，遊佐氏が初めてフランスを訪れたのがその翌年の1914年であった。偶然に過ぎぬ１年の違いで，ついにフィリスの馬術に接し得なかったのが「残念至極」だという遊佐氏の感懐は，まことに感動的である。〟

＊

遊佐氏は私がこの一文を書いた翌々年の1967年に，７月25日の入院のそれこそ２日前まで毎日騎乗を続けられ，その年の11月25日，83歳で昇天された。引用文の中に注しておいた第一出版の立派な１冊本『遊佐馬術』は，昔から遊佐氏と親交があって御自身長年の乗馬愛好者である同社社長の栗田確也氏が前年の66年に刊行されたものであり，晩年の遊佐氏へのまことによい贈りものであったと思う。私自身は遊佐氏とは，１人でやられる毎日の騎乗を１，２度見せて頂いたり，テレビで馬の話のお相手をしたことがあったりという程度であった。

だが，さて，私の〝乗馬歴〟という点からすると，このあたりから私は甚だ嬉しいような，甚だ困ったようなことになるのである。嬉しいようなというのは，ここから私は馬術の面白さにのめりこまざるを得なくなったことであり，困ったようなというのは，その結果いわゆる〝眼高手低〟がまざまざと自覚されだして来たということである。あのとりとめなく乗っていたその乗りかたの延長で馬に乗っている現実の自分と，自分の頭の中に急速かつ見事に構築されて来たあるべき形の〝馬術〟，理想像，その間にあって，それ以後私は大いに悩まなければならなくなるのである。

その悩みを横にそらして形をつけるべく，何らかの手段を私も思いつかなかったわけではない。つまりその悩みとは，分っていながらそう出来ぬといういわば欲求不満であるから，例えば馬書の蒐集であるとか，馬に関する東西の語彙の研究であるとか，それらを分類整理しつつある私のカードはもう10万枚を越えるかと思うが，そういう方法で何とか自分をなだめようと，努力してこなかったわけではない。しかし，そういう努力――私は私の中にホモ・ルーデンス（遊戯人間）を生誕させる無目的的努力だと思ってこれ自体を楽しんではいるわけなのだが――も，所詮はやはり，自分が馬に乗ることにおいてうまくなりたいという欲望の裏側の努力だと思わないわけに行かぬ。

ひとことここでちょっとはさんでおきたいが，〝馬術〟というものは，『遊佐馬術』についての先ほどの一文からもどれだけか分ってもらえただろうように，馬をとにかく速く走らせることを根本とする競馬というものとは，そもそもの発想から乗りかたの技術から，すべてにおいて全く違ったものなのである。馬に乗る，という点のみが共通する全く別種のスポーツで両者はあるということだけは，読者にのみこんでおいて頂きたいのだが，では〝馬術〟とは何であると私が理解しているかについて（私は今まで何度か書いたし）ここで改めて論じようとは思わないけれども，例えば〝１馬力〟という言葉があるでしょう。〝馬力〟というのは，スコットランドのジェイムズ・ウォットが18世紀の末あたりに〝強い荷馬車馬による実験の結果〟創始した力の単位だと『ブリタニカ』にあるが，〝１秒時に75キログラムの重量を１メートルの高さに揚げ得る〟までの力は，つまり工学上の１馬力までの力は普通の乗馬が持っていないとしても，とにかく１馬力，その大変な力というものを，調教と騎乗技術の結果，双の拳の間に収めてしまい，騎手のからだの僅かな操作，少量の肉体的エネルギーによって，巨大なエネルギーをはらむ１頭の馬を意のままに自在に動かし，軽やかに優美に舞わせる術，それが馬術だといってもよろしかろうと考える。

ただ面白いのは，自動車ならば，規定の通りに規定の部分を操作すれば，規定の通りの動きが生じるのに対して，馬の場合はまずその規定を馬にのみこませる長い期間（調教期間）が必要な上に，その規定を機械的に受けつけるものではないところの，しかも１馬力のエネルギーを内に持つところの生物で，相手があるということなのだ。

例えば，この一文のために私の騎乗姿を写真に写すということになって，弁慶号というよく調教された馬に私が乗って速歩をやるのだが，私としては規定の操作をやっているつもりだのに，弁慶くんはなかなか〝馬術的〟な姿勢をとってくれない。やがて小松崎先生見るに見かねて飛んで来て，ちょっと貸してごらんなさいといって御自分が乗られた瞬間から，馬は見事な姿勢をとって馬場を１周する。そこでまた私が乗って走らせると，ある10メートルほどは馬はそのようになり，と思うとふっと姿勢を崩し，かと思うとまた10メートルほどはきちんとなる。当方としては，常に全く同じ操作をおこなっているつもりなのにである。

小松崎先生が私の頭上に下す痛棒というのは，あるとき上のような形においてであり，またあるときは自ら行われる〝供覧馬術〟という名の筆舌を越えるばかり見事な模範演技においてである（それについての感想は，今年11月号の「太陽」に書いたが）。

――→　＊



1935年，インターハイでの障害飛越競技　一瞬間おそく写せば，もっとカッコよかったろうに

もうひとつの世界

26

グループ・5プラス1

ジューク・ボックス



これまで本誌に登場した動物たちは，第3号の類人猿をはじめとして，ネコ族，イヌ族など，みな哺乳類である。哺乳類は頭がよく，いろいろなことを学習して，巧みに生きていく。われわれ人間も哺乳類の一員であり，ことばをはじめとして，車の運転，パチンコのやり方にいたるまで，ひとつずつ学び覚えて暮らしている。

そこでわれわれは，動物の行動というものは，ひとつひとつ学習されるものだというように思っている。けれど，実際はそうではない。動物の行動はむしろ「ジューク・ボックス」に近いのだ。

ジューク・ボックスは，だれでも知っている。喫茶店やドライブインなどの片すみにあって，中にたくさん流行歌などのレコードがはいっている。手前には「A1」から始まってたくさんの「キー」があり，おのおのの番号のところに歌手と曲名が書いてある。

端にある「COIN」と書いてあるところへコインを入れれば，「SELECT」というランプがつく。20円入れれば1曲，100円玉を入れれば5曲のSELECTができる。そこで好みにしたがって，「B3」とか，「K8」とかいうキーを押す。

すると機械は自動的に動きだし，「B3」に当たるレコードを選びだして，それをガチャガチャッと中央へもってくる。そしてまもなく，尾崎紀世彦の〝さよならをもう一度〟が聞こえてくる。こういうわけだ。

ところで，このジューク・ボックスが，なぜ動物の行動にたとえられるのだろうか？

コインを入れなければ，いくらキーを押しても曲はかからない。それはたとえていえば，エネルギーがないからである。動物の行動も，エネルギーがなければ始まらない。では，そこが似ているだろうか？

どんな機械だって，エネルギーがなければ動かない。それに，ジューク・ボックスを動かすエネルギーは，ほんとうは電気のエネルギーであって，20円や100円玉のエネルギーではない。それは店のもうけになっているだけである。動物の行動は〝もうけ〟にはならない。

動物の行動とジューク・ボックスの類似点は，もっと別のところにある。

ジューク・ボックスには，何十枚かのレコードがはいっている。そこにはいっている曲なら，SELECTすればなんでもかかる。けれど，はいっていない曲は，どんなことをしてもかけることはできない。

あるボックスには「L3」に〝さよならをもう一度〟がはいっていて，〝恋の季節〟はどこにもはいっていないかもしれない。そのかわり別のボックスには，「L3」に〝恋の季節〟がはいっていて，〝さよならをもう一度〟は，どこにもはいっていないかもしれない。はじめのボックスをどうたたいても，ひっぱっても，〝恋の季節〟はかけられない。

動物の行動にも似たところがある。イヌをどれだけ喜ばしても，学習させても，〝ゴロゴロ〟いわすことはできないし，ネコをどんなにかわいがっても，イヌのようにしっぽを振ることはない。

どちらも喜ばせるという同じキーを押しているのだが，〝イヌ〟ボックスでは〝しっぽ〟がかかってしまい，〝ネコ〟ボックスでは〝ゴロゴロ〟がかかってしまうのである。それは，遺伝的にそのレコードしかはいっていないからなのだ。そのようなものを，動物が遺伝的にもっている（あるいは生得的な）行動パターンという。基本的にいえば，動物は生得的な行動パターンでしか行動できないのである。

もちろん，ある動物はいろいろな遺伝的行動パターンをそなえている。しかし，それだけでは，その動物が行動することにはならない。それはあたかも，ジューク・ボックスでSELECTのキーを押さなければ，何もかからないのと同じである。

ジューク・ボックスがひとりでに鳴っているように思えるときでも，それはだれかがSELECTをしてあったからなのだ。

動物の行動パターンのSELECTをするのは，おもに外界からの刺激である。外界の刺激にはいろいろあって，それぞれはどれかの行動パターンをSELECTする。そうすると，それに応じた遺伝的レコードが選ばれて，かかり始める。かかり始めたら，あとは自動的に最後までかかってしまう。

むかしは，刺激に応じて行動のごく少部分が〝つくりだされる〟ものと考えられていた。そして，刺激がいくつも組み合わさると，いろいろな行動が組み立てられるものと思われていた。ちょうど，楽譜の音符ひとつひとつに対応して，ある楽器がひとつひとつ音を出し，音符の組み合わせしだいでは，どういう曲でも組み立てられるのと同じように。

しかし，その後何十年かの研究で，考え方が変わってきた。刺激というのは，ジューク・ボックスでたとえれば，「L8」とか「P3」というようにひとまとまりのものであり，それに遺伝的〝レコード〟が1枚ずつ対応していること，そして，ひとつSELECTされれば，レコードは自動的に回りだしてしまうこと，その曲はあらかじめ遺伝的にできあがっているもので，途中から変えるわけにはいかないこと，などである。

いろいろな動物の，いろいろな行動が研究されるにつれて，動物の行動はジューク・ボックスに似ていることがますます明らかになってきた。そして，そのSELECTのキーに当たる刺激は，リリーサー（または解発因）と呼ばれるようになった。

もちろん動物の行動が，何から何までジューク・ボックスと同じであるわけではない。けれど，条件反射とか学習というのは，実はSELECTのキーが他のものでもよいことになるだけの話であって，レコードそのものまで変化するのではない。今，人間の行動も，そのような見方から見直されている。■　（Q）

---

* ――――→

しかし実は，私自身が先生のレッスンを直接受けて，罵倒（？）されつつ痛棒の直撃をくらうらしくはないこと，当然である。

これからは毎週に1度先生のレッスンを受けたいと思っているのだが，だが――と，先日私は若い友人である平福貞文カメラマンにふと話した。彼はここ数年来，小松崎馬術の神髄を動く映像によってにとらえようと，ほとんど眼の色が変っているかに思える人物である。

だが，どうせこれ以上ぼくがうまくなるとは考えられない。だから，うまくなるためにではなく，馬術をより深く理解できるようになるために，レッスンをお願いしようと思ってるんですがね。――

こんなことを今さら申しあげるのもなんですが――と，遠慮しいしいのように平福カメラマンがいった。うまくなろうと思ってやるのでなきゃいけないんじゃないですか？

私は一本やられたと思った。

うまくなるべくカッカと気持を燃やして，これからの私の〝乗馬歴〟をつくらねばなるまいと思っている。■　（劇作家）

漢字のふるさと　30

藤堂明保



馬（うま）　この字はウマを描いた象形文字である。紀元前15～11世紀に，黄河デルタに古代帝国を建てた殷の人たちは，もと低地の農耕民であった。また紀元前1027年に殷を滅ぼして，その後に「漢人文化」の基礎をきずいた周の人たちも，また農耕の民である。

これに対して，山西省・陝西省から西北の高原にかけて住んでいた羌族（のちの西羌，今日のチベット人の祖先），および北狄と呼ばれた人たち（のちの匈奴，チュルク人の祖先）は，はえぬきの遊牧民である。だから，殷・周の人たちは，ウマを飼ってはいたものの，遊牧民ほどにはウマに親しみがない。朝な夕なにウマを乗りこなして草原をかけめぐるのは，遊牧民の本領であった。中国西北の遊牧人種が，おりをみては騎馬兵力をかり出して中国に侵入するという，2000年にわたる東アジアの歴史が，ここに展開されたのであった。

「馬」（mǎ・mba）ということばは，罵倒の「罵」と同系である。むこうみずに相手につっかかるのを「罵」という。それはまた武勇の「武」（miua-miu-mbiu）とも近い。「武」もまた，むこうみずに突進することである。馬－罵－武は同系語であって，ウマが突進を好むということは，それを武力として利用するのに最も適していたのである。

漢代の書物に「馬とは兵の象（シンボル）なり」「馬とは陽なるものなり」などと述べているのは，すべてウマの本性をとらえた説明である。■

家ウマの種類

家ウマ。ウマ科ウマ属ウマのうち，野生馬についてはすでに述べたので，ここでは家ウマの種類，すなわち品種についてみていこう。人間がウマを捕えて家畜化して以来，農耕，車引き，乗馬などの仕事に向いたもの，ショーやパレードなどの観賞に適したものをつくるために，淘汰や選抜を行なったので，ウマはさまざまな形に変えられてしまった。

現在，世界各国で飼われているウマの品種は 200 以上で，同じ１つの種でありながら，大きさ，形，色とその姿はさまざまである。

ところで，第二次大戦後，急速に進んだ機械化の波は，ウマをも押し流した。交通機関として，動力として，農耕用として，あるいは軍馬として，幾千年という長い歴史を人間とともに歩んできたウマも，やがては動物園でしか見られない動物となるのかもしれない。

大戦後，およそ同じウマの頭数を維持しているのは，南アメリカと東南アジアの一部だけで，他の国では，年々おびただしい数のウマが姿を消している。フランスでは1913年に322万頭いたものが，1970年現在では，70万頭余りしかいない。1965年までの10年間に毎年12万頭が減少したという。日本もその例外ではなく，終戦時に 100 万頭いたものが1971年には15万頭ほどに減っている。〔注１〕

乗馬に限ると，競走馬，あるいはヨーロッパ，アメリカではレジャー用の遊歩馬も加えて，ここ数年来，むしろ増加している。しかし，農耕馬や輓馬は減少の一途をたどり，とりわけ機械化の犠牲をこうむった輓馬は，今ではもっぱら食用のために飼育されているといっても過言ではない。

ウマの分類

ウマの分類のしかたは，国によっても，学者によっても違っている。

1. 体高の大きさによって，大格馬，中格馬，小格馬と分けるもの。
2. 用途によって，人が乗る乗馬，車を引く輓馬，荷物を背負って運ぶ駄馬に分けるもの。
3. アラブの血が混じった軽快な乗用や輓用のものを温血種，ヨーロッパ原産の重厚な品種をもとに改良したものを冷血種とするもの。
4. アラブ，サラブレッド，アングロアラブを純血種，サラブレッドで改良したものを半血種，地方の未改良種を雑種とするもの。
5. 日本では，軽種，中間種，重種の３つに分ける方法がふつう用いられている。〔注２〕







ウマの体形の３種類。
(上)　高等馬術馬　リピッツァー　*PH. M. THERET*
(中)　競走馬　サラブレッド　*PH. BUZZINI*
(下)　重輓馬　アルデンナー　*PH. MANGIN-RAPHO*



純血種

ここでは，前記分類の4. に従うことにするが，純血種(pure bred)と呼ばれるものは，アラブ〔バルブも含める〕，サラブレッド，アングロアラブの3つの品種である。これらはいずれも乗馬で，品種としての特徴が遺伝的に固定し，あわせて厳格な血統登録がされている。

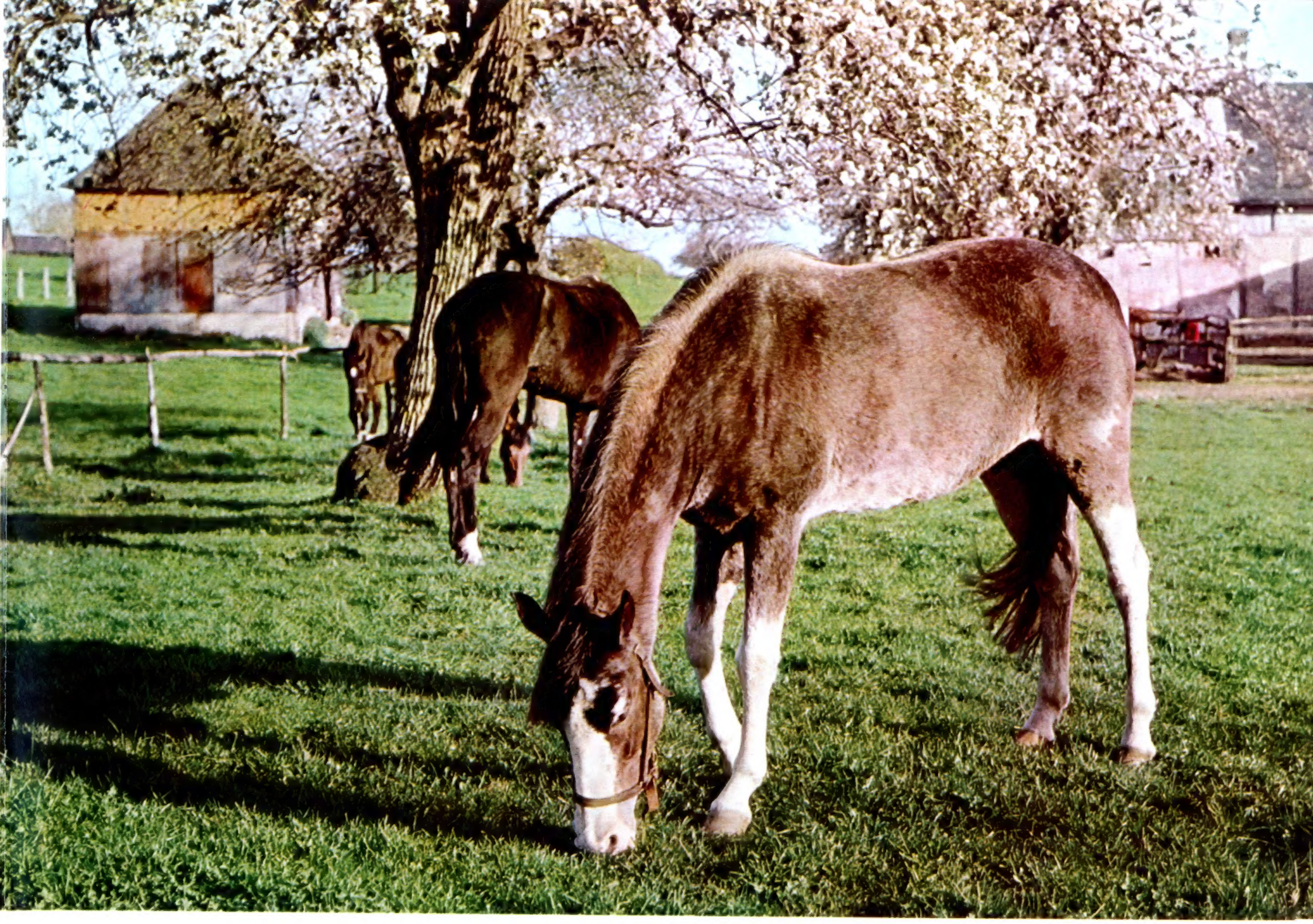
〈純血〉ということばは，ウマの生産に関する独特の用語で，ふつう使われる，異なった品種の血がはいっていないという意味ではない。たとえばアラブの場合だと，血統をたどっていって原産地がアラビア砂漠であれば純血といい，その先は問わない。また，サラブレッドは，イギリスの未改良種をアラブで改良してつくりだしたものであり，アングロアラブは，サラブレッドとアラブとの交配によってできたもので，アラブの血量が25パーセント以上であれば純血といっている。

次にアラブ，バルブ，サラブレッド，アングロアラブの順にみていこう。

アラブ。
深い胸，頑健な四肢，じょうぶな関節をもち
野性味を失っていない。
気品のある，ウマのなかのウマである。(上)
PH. PRENZEL-PRESS



アラブ。
アラブの頭部の特徴は
くさび形をしていることである。
小さくて形のよい頭，広い額，あくまで黒い目
鼻すじのまっすぐな横顔で，鼻孔は大きい。(下)
撮影　朝日新聞社出版写真部



アラブ

アラブ（Arab）は，通称アラビア馬と呼ばれている。ウマのなかで，もっとも古い時代に固定された品種である。砂漠のきびしい環境のなかに生きてきたから，耐久力と順応力はとびぬけてすぐれている。イギリスでつくられたサラブレッドとともに，ウマの品種改良の原種として大きな役割を果たしてきた。

アラブが東洋原産のウマであることに疑いをもつ学者はいないが，正確な発祥地については論議が絶えない。ある説では山岳地帯といい，別の説では砂漠地帯と主張している。

コーランには，マホメットが622年にメッカを脱出した際5頭の雌ウマを伴ったが，それがアラブの起源である，と述べられている。

ある伝説によると，紀元前2000年にイスマエルという男が天から与えられた，雌のせむしの子ウマが起源であり，そしてイスマエルの6代目，騎士サラマンが，せむしの子ウマの子孫から5頭の雌ウマを選びだしたのが，〈アラブの5大母系〉だという。

おそらくアラブの遠い祖先は，アーリア人やモンゴル人などのアジア系の民族によって飼育されていたのだろう。しかし現在のアラブは，チュニジアから東の，中近東に広く飼育されている。北アフリカのものは，バルブとの混血馬が多い。

アラブは，ウマのなかでも，サラブレッドと並んでもっとも美しいウマだといわれている。大きさはウマとしてはふつうで，均整のとれた軽快な乗馬である。体高は155センチを越えず，体重は350〜400キロである。

頭はやや小さく，顔は彫りが深く，額は広く，鼻すじがまっすぐで，目は豊円で，黒いひとみが知的である。耳はやや小さくてよく動く。鼻翼が薄く，鼻孔は大きい。

頸（くび）はゆるい弧を描き，すらりとして，絹のような豊かなたてがみをもち，それがアラブ特有の美しさになっている。鬐甲（きこう）は高く，尻は広く，胸は深い〔注3〕。尾は高く水平につき，尾毛は細くて長く，密生している。ひづめは小さいが強靱で，四肢（しし）の筋肉はよく発達し，関節は大きく輪郭がはっきりしている。毛は葦毛，鹿毛，栗毛が多く，河原毛や青毛も見ることがある。

現在，ヨーロッパのアラブ生産は衰退の一途をたどっているが，アメリカではプレジャーホース（pleasure horse，遊歩馬）やトレイルホース（trail horse，耐久競技馬）としてたいへんな人気である。

バルブ

バルブ（Barb）は，アラブからできたものだという説と，そうではなくて，アラブと共通の祖先から，ほぼ同じころに分化し，アフリカで繁栄した，という説があるが，ともにアラブと区別していない。原産地は，アルジェリア，チュニジア，モロッコ，トリポリといったバーバリ地方である。

8，9世紀ころに東洋のウマがヨーロッパに持ちこまれたが，現在のバルブにはアラブの血がかなり混じっている。アラブより粗野だがじょうぶで，従順で，粗食にも耐える。鼻梁（びりょう）が突きでているものが多く，肩に丸みがない。

バルブの子ども。
北アフリカにすむ
遊牧民族ベドウィンのウマである。
アラブよりも丈が低く，優美さも劣るが
性格はじみで，耐久力に富んでいる。

PH. ALMASY







サラブレッドの横顔。
〈人間のつくった最高の芸術品〉といわれるように
たんに走るスピードが速いだけでなく
このウマのもっている気品には
どこかおかしがたいところがある。(上左)

撮影　朝日新聞社出版写真部

サラブレッド。
世界じゅうの競馬場における王者も
その歴史は比較的新しい。
200～300年ほど前にイギリス在来種をアラブで
改良し，つくったものである。(上右)

PH. ALMASY

フランストロッター。
フランスでは速歩競走馬として飼育している。
これはノルマントロッターである。
アメリカントロッターで改良したものもいる。(下)

PH. LAUROS

サラブレッド

サラブレッド（Throughbred）は，もっとも速力の早い競馬用のウマで，スピードだけを追求して淘汰と改良を続けた結果できあがった品種である。純血種という呼び方は，もともとこのウマのためのもので，〈人間のつくった最高の芸術品〉とも〈ウマの貴族〉ともいわれ，このウマへの賛辞はつきない。

しかし，サラブレッドの起源は比較的新しく，17世紀にイギリス王チャールズ2世が，トルコ，アラビア，アフリカ地中海岸のバーバリ地方からウマを輸入してイギリスのウマの改良をはかり，速力と耐久力にすぐれた乗馬をつくったのに始まる。

現在のサラブレッドは，3頭の種馬のいずれかの血を引いている。それらの3頭は，ダーレーアラビアン〔純粋のアラブ〕，ゴドルフィンアラビアン〔バルブ〕，ビヤレーターク〔バルブの血がはいったアラブ〕であり，これを〈サラブレッドの3大種牡馬〉と呼んでいる。

そして，父系にダーレーアラビアン，母系にゴドルフィンアラビアンをもつ1764年生まれの〈エクリプス号〉，ゴドルフィンアラビアンを父系にもつ1742年生まれの〈マッチャム号〉，ビヤレータークを父系にもつ1758年生まれの〈ヘロド号〉が，史上もっとも有名な競走馬であり，現代のすぐれた競走馬のほとんどはこれらの血を受けているという。

サラブレッドは，アラブにくらべてはるかに大きく，鬐甲（きこう）までの高さ，すなわち体高は160～165センチ，体重も450キロ以上である。大きくて利口そうな目，気品のある頭，長く弓なりにのびた頸（くび），よく発達した鬐甲，長く傾斜した肩，短い背，深い胸，丸みのあるあばら，幅が広くて肉づきのよい尻，高い尾つき，なめらかな四肢（しし），形のはっきりした関節など，均整のとれた美しい姿は〈芸術品〉と呼ぶにふさわしい。

サラブレッドには2つの変種ともいえるウマがつくられている。1つは短距離競走用のスプリンター，もう1つは耐久力のすぐれた長距離競走馬ステイヤー〔注4〕である。



アングロアラブ。
アラブとサラブレッドとの交配でつくられた
馬術競技に適した乗馬である。
からだの毛の色は連銭葦毛である。

撮影　朝日新聞社出版写真部

アングロアラブ

アングロアラブ（Anglo-arab）は，フランスでつくられた乗馬で，散歩用乗馬または馬術競技用乗馬として定評がある。サラブレッドとアラブとの交配によってつくられ，両方のすぐれた性質を兼ねそなえていて，サラブレッドの体格，体形，速力に加え，アラブの強健さと耐久力とをもつ。肩が長く，胸が深く，肢（あし）や関節が強く，運動に柔軟さがある。

アングロアラブには，アラブの血が25パーセント以上混じっていなければならない〔注5〕。体高はアラブとサラブレッドとの中間で，150～160センチである。

半血種

半血種（half bred）という呼び名は，もともとサラブレッドの交配によって，改良固定された，軽い乗馬および輓馬を総称したものである。自動車の出現によって，半血種の乗馬や輓馬の需要は著しく減少しつつあるが，これまでにつくられた半血種は，きわめて種類が多い。乗馬と輓馬に分けて半血種の品種をみていこう。

乗　馬

乗馬（riding horse）は，乗用のウマとしての体形をもった品種の総称である。ひとくちに乗馬といっても，品種や特徴はまちまちで，散歩用乗馬，狩猟用乗馬，ポロ競技用乗馬など，利用する目的によって，大きさや体形に著しい差がある。ここでは，半血種の乗用馬としてハンター，ハクニー，フランストロッター，コブ，アンダルシアンをあげておこう。

ハンター

ハンター（Hunter）は，おもにアイルランドとイギリスで飼育されている。ハンターとは，ウマの品種の名というよりは，乗馬の1つの型である。ハンター〈狩人〉という名のとおり，元来は，狩猟犬に追いださせた獲物の追跡用の乗馬としてつくられたものである。

現在では，馬術競技にもっとも適したすぐれた跳躍馬として喜ばれ，世界各国に輸出されている。東京オリンピックの総合馬術競技に優勝したイタリアチームは，アイルランド産のハンターに乗っていた。

ハンターは，半血種の雌に，サラブレッドの雄を交配してつくる場合が多い。また母方の半血種には，しばしばクリーブランドベイ



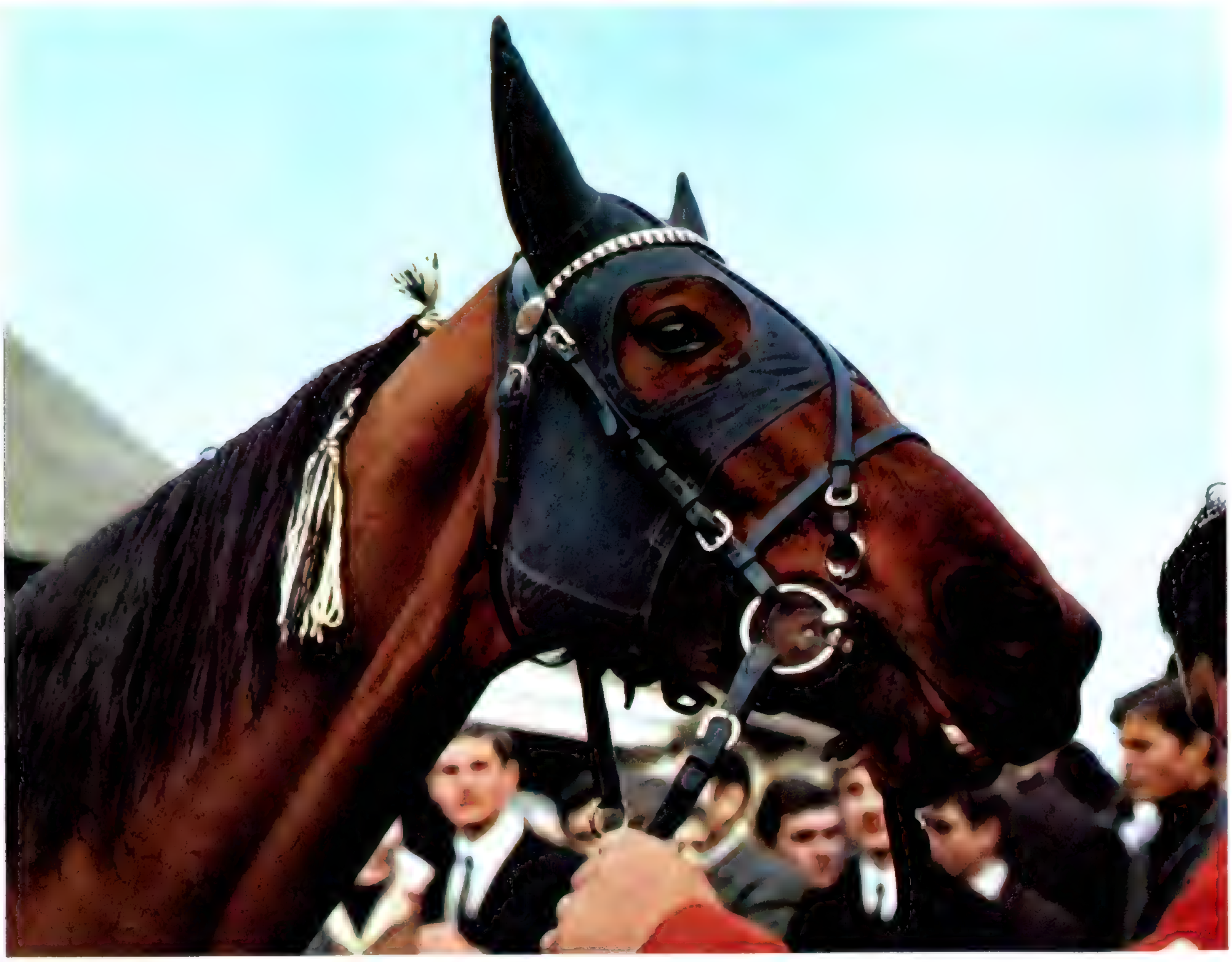
（Cleveland-Bay）を用いる。現在では1つの品種として取り扱われており，種馬もいるが，体形の固定化まではいっていない。

優秀なハンターは，重厚な頸（くび），筋肉のよく発達した関節をもっている。毛色は，栗毛，鹿毛，葦毛などが多い。

ハクニー

ハクニー（Hackney）はイギリス原産で，やはりイギリス原産のノーフォークロードスター（Norfolk roadster）にサラブレッドを交配したものである。もともと乗馬だが，軽い馬車を引く輓馬にも使われ，また，前肢（ぜんし）を高く上げる独特の誇張した歩き方をするショー向きの速歩馬として固定された。

速歩にすぐれ，トロッター生産用の種馬として，世界各国に輸出されている。肩の立った，飛節（ひせつ）のじょうぶな，腹の少し巻きあがった，引きしまった体格が特徴。大型をハクニー，小型をハクニーポニーという。



ブルトン
フランス西部ブルターニュ半島のウマの総称。
ブルターニュ地方には大格のものが，
山岳よりには小格のブルトンがいる。
重量のある輓馬である。（上）

撮影　間

アングロノルマン
乗馬あるいは輓馬でノルマンジー地方産。
狩猟にも，馬術競技にも向いた
用途の広いウマである。（下）

PH. P. BERTRAND







フランス トロッター

フランストロッター（French trotter）は、ノルマントロッターおよび半血種トロッターの総称である。18世紀のはじめころから、フランスのブルターニュ地方を中心として、広く分布したノルマンジーの在来種に、イギリス産のサラブレッドやノーフォークトロッター（Norfolk torotter）を交配して改良した結果、コブ型（Cob）とセル型（Sel）との２つの異なった体形をもつアングロノルマン（Anglo-Norman）、またはノルマン（Norman）という品種が生まれた。

1836年、フランスに速歩による競馬が始まると、ノルマンジーの種馬牧場は、速歩競走馬の生産に力を入れ、イギリスから速歩にすぐれたノーフォークトロッターを輸入した。以来、トロッター〔速歩馬〕生産は、輓用としても乗用としても広い用途を得て、発展した。

その後アメリカから、アメリカントロッター（American t.）を入れて、ノルマンの速歩速度はいちだんと増し、ノルマントロッターと呼ばれるまでになった。ノルマントロッターとその他の半血種トロッターをいっしょにして、フランストロッターと総称する。

また19世紀末に、軍の要請で重騎兵に供給する、耐久力のある乗馬がつくられた。これがノルマン重乗馬である。現在でも狩猟などに使われる。

コ　ブ

コブ（Cob）は、重騎兵馬としてつくられたウマである。からだは筋肉質で、鬐甲（きこう）が高く、スタミナがある。体高157センチ以下で、頑健で耐久力もあり、狩猟用、野外騎乗用としてすぐれ、また軽輓馬としても使われる。あらゆる用途に役だち、よい農耕馬でもある。

アイルランドやイギリスのウェールズ地方などで生産されるコブは、在来のポニーにハクニーの種馬を交配している。フランスでは、おもにノルマンの輓馬型のものを呼ぶ。

セルフランセ。
フランスの乗馬の意味である。
フランスでは
乗馬として使われる半血種のすべてをいい
この名称を１つの品種名として用いている。（上左）
PH. BUZZINI

アンダルシアン。
古いスペイン馬の子孫であり
アラブとバルブの血を引いている。
全ヨーロッパで乗馬として名声を博していたが
今では、散歩用乗馬や闘牛に使われている。（上右）
PH. LAROUSSE

コブ
アングロノルマンのうち、体高が低く骨太で
散歩用乗馬，狩猟用乗馬，軽い馬車引き
農耕にも用いられている。（下）
PH. BUZZINI



アンダルシアン

アンダルシアン（Andalusian）は，古いスペイン馬の子孫で，アラブとバルブの血を受けている。かつては，外観の優美さ，耐久力の強さ，従順な性質によって，全ヨーロッパにその名を知られた。運動の機敏さと優雅さが，スペイン人の気風に合い，散歩用や闘牛用の乗馬として，現在なお広い用途をもつ。

17世紀にアンダルシアンの種馬が，イタリアのトリエステに近いリピッツァー種馬牧場に持ちこまれ，高等馬術用馬として世界的に有名なリピッツァー（Lipizaner）という品種の始祖となった。毛色は葦毛が多い。



リピッツァー。
もともとはアンダルシアンで
イタリアのトリエステ近くのリピッツァー牧場で
つくられたものである。
祖先のスペイン馬の黒い目を受けついでいる。（上）
PH. ALMASY

リピッツァー。
体高155センチ余りとそれほど大きくはないが
目は表情に富み
じょうぶな肢と太い腱が目につく。
ふつう葦毛で，鹿毛，栗毛，糟毛もみられる。（下）
PH. ALMASY

アラブ。
アラブは乗馬の祖先である。
さまざまに改良された現代のウマのすべてが
アラブの力によるといっても過言ではない。
スピードはサラブレッドには及ばないが。（右）
PH. PRENZEL PRESS







ムスタング。先史時代を除けば，ウマのいなかったアメリカ大陸だが16世紀初期にスペイン人がヨーロッパからアメリカ大陸にウマを入れた。そのウマの一部が逃亡して野生化した。ムスタングは，第２次大戦中に乱獲されて少なくなったが，現在は保護され，合衆国南東部の草原で，年長の雄ウマの指揮のもとに，群れをつくって生活している。

PH. J. VAN WORMER



輓　馬

輓馬（draft horse）は，乗馬にくらべるとはるかに筋肉質で，骨が太く，体重もあり，重厚な感じを与える．太い頸（くび），幅広い胸と尻，短く太い肢（あし），大きなひづめ，密生したたてがみと太い尾，豊かな距毛〔球節の後ろの毛〕などに特徴がある。輓馬の改良はここ100年ほどで，とくに大型化して体重1トン，1.5トンというのもある．重輓馬と軽輓馬とに分けている．

ペルシュロン

ペルシュロン（Percheron）は，輓馬のうちでもっとも大きいものの1つで，フランスのノルマンジー半島のペルシュ地方が原産地である。19世紀末からすぐれた輓馬として，広く外国に輸出された．

スタミナに富んだ輓馬で，速歩で1日平均56キロを走る能力をもち，体高は165センチ余りである．頭がやや大きく，頸の筋肉はよく発達し，胸は広く，尻は大きくて，肉が盛りあがった複尻である〔注6〕毛色は葦毛または青毛だが，この青毛はとくにアメリカ人の好みで選ばれたものである．

ペルシュロンの名称は，ペルシュ地方で生産されたものに限って使われ，他で生産されたものは同じ血統でもこの名称を使わない。

ブーロンネ

ブーロンネ（Boulonnais）は，フランスのブーロ…ュ地方が原産地で，フランスのもっともすぐれた重輓馬といわれる．古代ローマ軍の軍馬と在来種との交配によるものが祖先だといわれ，十字軍が持ち帰ったアラブの血を加えて，体形や資質が改良された．のち体重を増すためにドイツのメクレンブルク（Mecklenburg）の血を入れ，また，品位と速歩のためにスペイン馬の血を入れた．

体形的にも，活発な性格からも，また柔軟で力強いからだからも，理想的な輓馬といえる．体高155～170センチ．毛色は葦毛である．かつて大西洋岸の魚をパリに急送する輓馬に使われたが，現在は農耕馬である．





セルフランセ。乗用の半血種．
馬術競技に使われるウマで
葦毛がひときわこのウマの聡明さを
浮きだたせている．
その目は，語りかけるようでもある（左）
PH. AARONS

ペルシュロン．
フランスのペルシュ地方で飼われている
おもに農耕用の輓馬である
輓馬のうちでも美しい姿をした品種である．
からだの色は連銭葦毛。（上）
PH. BUZZINI

ブーロンネ．
やはりフランスの輓馬である。
中型ないしは大型の重輓馬
かつて英仏海峡の魚をパリに急送する輓馬として
知られていた。（下）
PH. J. SIX





アルテンナー。
かつて先史時代にフランス南部にいた
プルツェワルスキーウマに類似するウマの
直系の子孫であるといわれている。
温和な輓馬である。(上)

PH. FRÉDÉRIC JACANA

ノリーカー。
ドイツの地方種でかつては
このような地方独特の特徴をもつウマが
農耕や輓用に
使われていたものである。(下)

PH. W. LUMMER

アルデンナー

アルデンナー(Ardenner)は、新生代第四紀のはじめごろフランスに生息していた、ソリュトレ馬〔注7〕の直系の子孫で、体高は152センチ以下である。シーザーは『ガリア戦記』に、このウマのことを《野性的でしんぼう強く、疲れを知らぬ》と書いている。

17～18世紀にかけて、アラブの血を入れて改良しているが、それでも南ヨーロッパ洪積世のウマの特徴を残している。中世の騎士のウマ、いわゆる大軍馬(great horse)の基礎になった。ナポレオンがロシア遠征に敗れて雪のなかを退却したとき、空腹と疲労と寒さに対して、もちまえの耐久力を発揮した。

頭は、鼻梁(びりょう)がややへこんだ長方形で、胸が深く、背が短くて、筋肉が発達し、四肢(しし)はがんじょうである。体高160センチ余り。性質が温和で、使役に適し、飼育しやすい。毛色は鹿毛、栗毛、糟毛である。

ノール輓馬

ノール輓馬(Trait du Nord)は、もっとも体重の重い種類にはいる。20世紀初期に、ベルギーの大型輓馬のブラバンソン(Brabanson)と、アルデンナーとの交配によりつくられた。



堂々としていて、あらゆるウマのうちもっとも力が強く、耐久力がある。頸（くび）は短く、胴はがっしりとして太く、短く、がんじょうである。筋肉が発達し、おとなしくて使いやすい。体高170センチ、体重800～900キロ余り。毛色は鹿毛、栗毛、糟毛など。

オスア

オスア（Auxair）は、アルデンナーと同じ系統だが、性質ははるかに粗暴である。原産地はフランスのブルゴーニュ、とくにオスア地方とされている。アルデンナーとノール輓馬とオスアとは、近縁関係にあり、これらを総称して、東部フランス輓馬と呼ぶこともある。

コントワ

コントワ（Contois）は、起源の古い輓馬である。5世紀のゲルマン民族の大移動の最中に、ブルグンド族がフランスに持ちこんだ北方系のウマの子孫である。ドイツ皇帝カール5世は、ブルゴーニュ馬の改良のため、16世紀にこのウマを輸入したといわれる。フランスのルイ14世時代には、砲兵の輓馬として使われていた。体高150～160センチ、頭はやや角張り、頸はまっすぐで、尻は卵円形をしている。中型の輓馬として農耕にも使う。

ブルトン

ブルトン（Breton）は、フランスのブルターニュ地方原産の中型ないしは大型の輓馬で、その改良の歴史は複雑である。在来の北部ブルトン、山地ブルトン、南部ブルトンの3種類が基礎になり、そこに外国馬の血を導入したものである。現在のブルトンには3つの型がある。

トレ・ブルトン（Trait b.）は輓馬型で、アルデンナーの血が多くはいり、体高150～160センチとやや小型だが、頑健でスピードもあるうえ、引く力も強く、耐久力もある。

コルレ・ブルトン（Corlay b.）は乗馬型。サラブレッドとの交配で姿が美しい。

ポスチェ・ブルトン（Postier b.）は小型で肢（あし）が短く、活発で速歩が美しい。

シャイヤー

シャイヤー（Shire）は、イギリスの大きな輓馬で、ショーやパレードにだけ使われ、りっぱな姿をしている。体高2メートル、体重1.4トンもある。このほかイギリス輓馬には、ブラックホース（Black horse）、サッフォク（Suffolk）、クライズデール（Clydesdale）がある。

雑　種

乗馬や輓馬のどれにも属さないウマがいる。多くは未改良の在来種で、荷物運搬用の駄馬や山岳地帯の乗馬に使われる。

ポワトゥ

ポワトゥ（Poitou）は、ラバを生産するためのウマで、フランスのポワトゥ地方が原産地である。体高165センチほどで格別の特徴のない平凡な体形のウマである。雄ロバとの交配によって、体格の大きいラバをつくる〔注8〕。ふたごを生むこともあるが、1頭のときよりむしろ事故が少ないという。



コントワ。
北方系のウマで、中型の輓馬として使われる。
白い牧柵の中で、のどかに草を食む
そんな光景を見るだけのためであっても
ウマを滅びゆく動物に加えたくないものだ。（上）
PH. ARONS

ポワトゥ。
ラバを生産するためのウマである。
この雌とロバの雄との交配でラバができる。
また、雄ウマと雌ロバの場合に生まれてくる子はラバでなくてケッティと呼ばれる。（下）
PH. M. THÉRET



ポニー

ポニー（pony）は，イギリス特産の背たけのごく低いウマである〔ふつう体高148センチ以下のウマをポニーといっている〕。かつて，イギリスのウマの大型化を計画した政府によってポニーの絶滅がはかられ，屠殺奨励金さえ設けられたが，ついになくすことはできなかった。体高120～130センチの小型なウマが，山岳地帯での荷物の運搬，狭い炭鉱内での作業，子どもの乗馬などに使うのにたいへん便利であることを，地方の人はよく知っていたからである。

ニューフォレストポニー（New Forest p.）やハイランドポニー（Highland p.）は，アラブとの交配によってつくられたものである。また，ウェールズポニー（Welsh p.）は，サラブレッドとの交配によって改良されたものである。このような改良種でも，ポニーの頑健さと，豊かな野趣はなくなっていない。

シェトランドポニー（Shethland p.）は，世界でもっとも小さなウマである。あらい長い毛におおわれた，たいへん古い品種で，6世紀にはその存在が知られていた。もともとイギリス北部のシェトランド諸島の野生馬であり，体高は1メートル余りで，たくましいが，粗暴で気むずかしいのもいる。〔注9〕

コンネマラ（Connemara）というポニーは古くからアイルランドにおり，体高135～145センチで，アングロアラブに似ている。



ニューフォレストポニー。
イギリス南部のハンプシャー原産である。
体高を高くし，スピードを出すために
アラブの血が加えられている。
ポニーとは体高148センチ以下のウマ。（上）
PH. W. LUMMER

シェトランドポニー。
イギリス北部のきびしい自然のなかに育った
がんじょうなウマである。
このウマの血統登録を受けるためには
体高が107センチ以下でなければならない。（下）
PH. LANCEAU - JACANA

アイスランドポニー。
シェトランドポニーによく似たウマだが
からだはもっと大きい。
被毛の色は栗毛である。（右上）
PH. ARCHIVES JAHAN NOEL







ウェールズポニーは、粗野だが敏捷なところがあり、イギリスのポロ競技用の乗馬に使われる（下右）

PH. FONTAINE–RAPHO

ハイランドポニーは、スコットランドの山岳地方に産する小型のウマである（下左）

PH. HOLMES–LEBEL

カマルグ馬

カマルグ馬（Camargue pony）は，ローヌ河口に近い，フランス南部のカマルグ地方の産馬で，たいへん古い品種である。プルツェワルスキーウマとの血縁が深いフランスのソリュトレの遺跡で発見された古代の野生馬の子孫である。ウシの放牧監視用の乗馬に用いられており，バルブによって改良されたが，在来種としての粗野な特徴を失わない。

カマルグ馬は，ローヌ川の沼沢地帯で，塩分が強いために農耕に適さないアルルの草原に，半ば野生の状態で放し飼いにされている。野生馬と同じように，年長の雄ウマの指揮のもとに，群れをなして生活している。現地では，このウマの群れをマナド（manade）と呼んでいる。

体高135～145センチ，たてがみの密生した，みるからに野趣のあるウマである。そまつな食物に耐え，敏捷で，おとなしく，からだの小さいわりには耐久力がある。毛色はほとんど葦毛である。

これよりもずっと体高の高いカマルグ馬もあり，毛色はくすんだ葦毛である。これはバルブやアングロアラブとの交配によってつくられたものだが，改良をもくろんだ予想に反して，生来の美点をまったく失った平凡なウマである。



カマルグ馬。
フランス南部で，半野生の生活をするウマとして
知られている。アルベール・ラモリスの
映画「白い馬」でご存じのかたも多いだろう。
たいへん古い時代のウマの姿を伝えている。
PH. Z. E. A. RAPHO

ピレネー馬

ピレネー馬（Pyrenee pony）も，半野生の状態で生活している。現地のバスク人たちは，これをポトカクまたはポトックと呼んでいる。ピレネー山脈ぞいのエスペレット地方に分布するが，とくにニーブ川の支流，ラクサ川の渓谷に集まっている。

この渓谷は山に囲まれており，自然の柵をめぐらした牧場となっている。ウマの所有者は，定期的に捕獲するだけで，きわめて粗放な管理をしている。

山岳地帯にすむすべてのウマと同様に，ピレネー馬は，丈も低く，頑健な四肢（しし）をもち，しかも粗野である。閉鎖的な環境にいるので近親交配になりやすく，他の品種の血が混ざることもないので，体格，資質ともに低下している。もともと，このウマは経済的価値に乏しく，積極的な品種改良もされていないので，近いうちに絶滅するかもしれない。

ムスタング

ムスタング（Mustang）は，先史時代にいたウマが絶滅して以来，ウマのいなかったアメリカ大陸に持ちこまれたスペイン馬の子孫である。

アメリカ大陸にウマを持ちこんだのは，古代アスティカ王国を滅ぼしたスペインの軍人コルテスで，そのウマは，すでにコロンブスがキューバに連れてきていたスペイン馬であった。コルテスは1519年，8頭の雄と7頭の雌とを連れてきた。

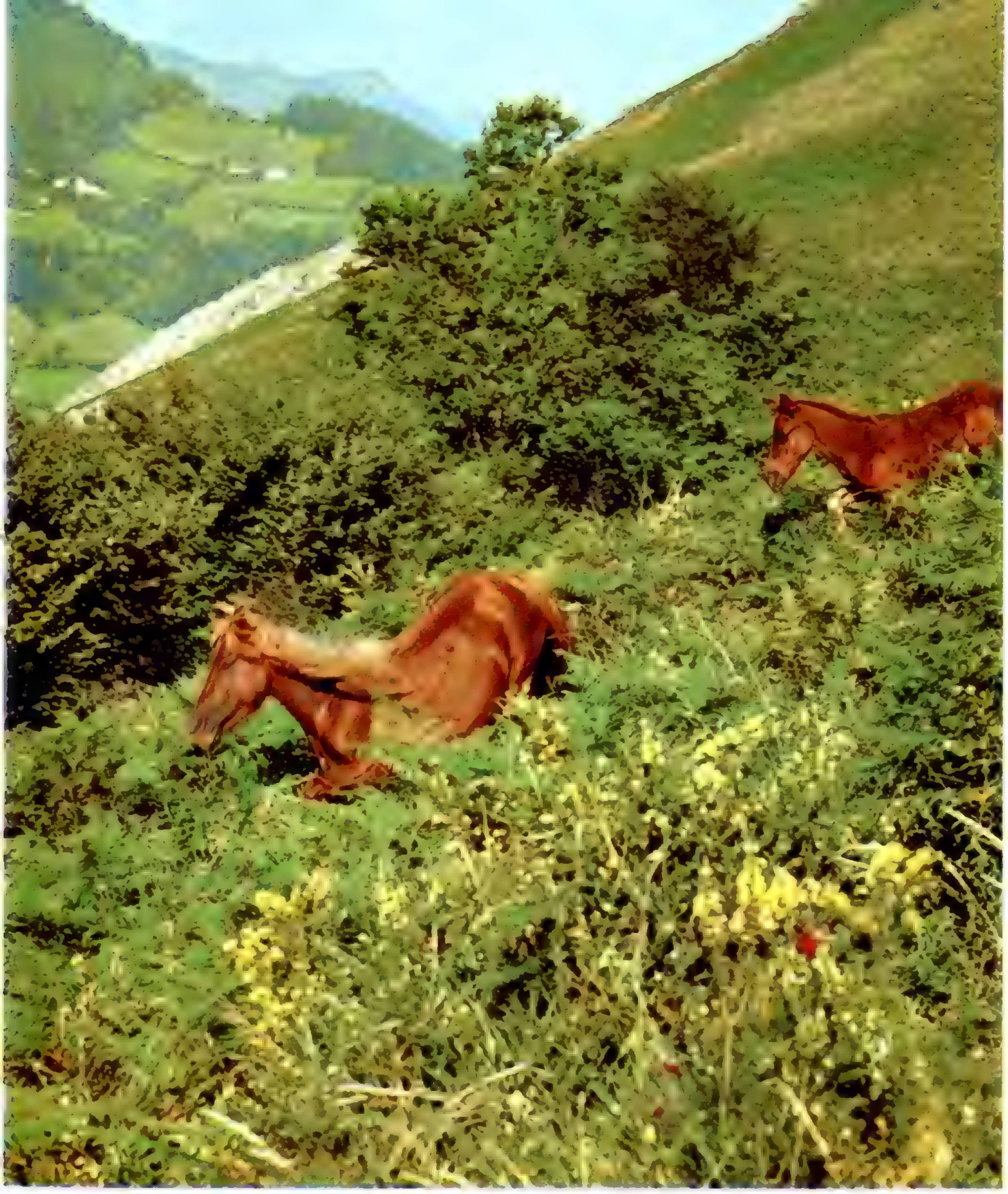
この15頭のウマをはじめ，ヨーロッパ人が持ちこんだウマは，ウマのいないアメリカ大陸の征服に大きな貢献をした。そのうちの何頭かは人間の管理下から逃げだし，野生にもどり，メキシコから，カナダと合衆国との国境にいたる広い地域にひろがっていった。これがムスタングである。ムスタングの語源は，スペイン語の放浪者，メステンゴ（mestengo）からきている。祖先のスペイン馬のもっていた優美さは多少失われたけれども，野生に帰ることによって，生活力と聡明さと忍耐力は増した。

ムスタングの多くは，インディアンに捕えられたが，西部の牧場のカウボーイの乗馬の生産に貢献した。第二次大戦の末期に，深刻な食糧不足が訪れたとき，当時まだ残っていた野生馬の多くは，捕えられてかんづめになり，ヨーロッパの人びとに食べられてしまった。

現存する少数のムスタングは，1957年以降法律によって保護されている。

南アメリカにも，半野生のウマがいる。パ

ピレネー馬。
ポトカクあるいはポトックともいい
ピレネー地方でバスク族が放し飼いにしている。
しかし，めったに手をつけない
粗放な管理をしている。（右ページ上左）
PH. MERLE-IMAGES ET TEXTES







ラグアイでは北アメリカと同様にムスタングと呼び、アルゼンチンではシマロン（Cimarrones）と呼んでいる。広い地域に分散するのを防ぐために、週に1度は集めて、外傷の手当てや簡単な手入れをし、ウマの血を吸うチスイコウモリから守るために、ふんを塗りつけたりする。だいたい3年おきに種馬のたてがみと尾を切り、目じるしにしている。

このウマは、何千頭もの大群をつくり、1年じゅう、大草原にすんでいる。雄は、12頭から18頭の雌を支配し、いつも自分のまわりに引きつれていて、他の雄が近づくと、むごいほどのしうちを加えて追いはらう。よそ者を加えない、完全に閉鎖された生活であるから、長い年月の間に退化現象もあらわれ始めている。

頭はやや大きく、耳は長く、関節が大きい。被毛は、冬にはかなり長くなるが、たてがみと尾の毛は四季を通じて薄い。

日本の在来馬

日本の在来種（Japanese nature pony）、すなわち日本のウマは、アジア大陸から渡来して日本人の祖先になったツングース族が、日本に連れてきたウマに由来しているという。

源平の時代から徳川にかけて、北は北海道から南は九州の島々まで、地方色豊かなウマが生産されていた。明治以降は軍馬増産の声とともにヨーロッパ、アメリカの改良種におきかわり、現在では20頭足らずのトカラ馬と数百頭の北海道和種、数十頭の御崎馬を残すだけとなった。

トカラ馬（Tokara pony）はシェトランドポニーやスキロスポニー（ギリシャ）、済州馬（朝鮮）などとともに、世界でも数少ない島嶼産のポニーで、体高115センチ、体重180キロにすぎない。

北海道和種（Hokkaido pony）は、渡島、檜山などがおもな産地で、かつては1万頭以上が飼われていた。体高132センチ、体重300キロ。毛色は青毛、鹿毛、栗毛など。側対歩（そくたいほ）を得意としている。

都井馬、あるいは御崎馬（岬馬）といわれる宮崎県都井岬のウマは、半野生の状態で1年じゅう放牧され、自然の繁殖にまかされている。体高の平均130センチ、体重250～300キロである。毛色は青毛と鹿毛。天然記念物に指定されている。

御崎馬。宮崎県都井岬に徳川時代から放牧され
半野生の生活をしている。在来の日本馬の
姿かたちをかなり残す。（上右）　撮影 今井寿恵
北海道和種。やはり日本在来種で、かつて
北海道に広く飼われていた。被毛は河原毛。（中）
撮影 朝日新聞社出版写真部



ムスタング
野性みあふれる精悍さで
スポーツカーの名まえにもなっている。
明けかたの光のなかを地響きを残して走る。
これはパラグアイで半ば放し飼いのもの。（下）
PH. J. R. HALMITON HOLMES LEBEL

チャド馬

インドや南アメリカにも多数のウマがいるから、熱帯の気候がウマに適していないとはいえない。しかし、アフリカ大陸では、ウマの普及度はきわめて低い。そのおもな原因はツェツェバエによって媒介される、眠り病によるのである。ツェツェバエの分布の北限は、チャドである。チャドはアフリカのなかでも、古くからウマの生産地として隣接の国々に輸出していた。

チャド馬（Tchad）は、動物の生息可能な地域の限界を決める原因に、特定の種類の動物がかかる病気もあるという、興味深い例を示していることになる。また、ヨーロッパや日本などでは、ウマの消滅が心配されているが、チャド馬はむしろ逆にふえており、盛んに使用されている。

チャド馬は、東部アフリカ、あるいは北部アフリカから移動してきた、遊牧のヒツジ飼いたちが持ちこんだものだと考えられている。チャド馬には３つの体型がある。

ドンゴラ馬型　体高150センチと高く、体重は370キロ程度。鼻梁（びりょう）がやや高い横顔をしていて、毛色は栗毛、または鹿毛で、色が濃く、肢（あし）に白斑がある。

バルブ型　体高144センチとやや低く、頭は直頭である。毛の色は鹿毛、栗毛、または白と黒のぶちである。

キルディ型、あるいはロゴーヌ・ポニー型　スマートな姿はしていないが、性質のおとなしいウマである。体高は115センチを越えず、体重も170キロという小さいからだをしている。チャド馬のうちでは、眠り病に対してもっとも抵抗力が強い。しかし、そうかといってチャド以南にまで分布をひろげるにはいたらなかった。

現在のチャド馬の飼育数は、1965年の15万頭の推定よりもかなりふえている。種馬牧場を創設したことが、無分別な交配による失敗をなくし、チャド馬を品種としての固定化に導いた。このウマは、気温の高い、しかも乾燥した土地にすんでいるので、粗食によく耐え、忍耐強いのが特徴である。

ファンタジアの主役

チャド馬は、かつては、戦闘や狩猟用のウマとしてすぐれた能力を発揮し、とりわけ、キリンやゾウ狩りになくてはならない道具であった。現在では、日常の乗馬として、また散歩用馬として普及し、また勇壮なファンタジアの主役として活躍している。

ファンタジアは、もとはアラビア騎兵の騎馬芸であった。全力疾走と急激な停止をおりまぜた、激しい演技であり、また馬術の競技でもあった。チャドの各部族は、飾りたてた馬具で、他の部族に誇示しあうのである。



ファンタジアとチャド馬
ウマが主役となるファンタジア（祭）には
各部族が飾りたてたウマで演技を競う。
チャド馬は熱帯の暑さによく耐える。
PH. FIEVET-LERIQUE PHOTO

日本在来種の歴史

野村晋一

「わが国の石器時代にウマあり」とは，鹿児島県出水貝塚からウマの繋骨（けいこつ）を発掘した長谷部言人博士の有名なことばだが，種名の確立されぬエクウス〔ウマの祖先〕の頬骨（きょうこつ）化石が，石川県，兵庫県の各地で発見されている。

須佐之男命が，生きウマの皮をはいで，姉の天照大御神の機屋に投げこんだ『古事記』の話はさておくとしても，「カミノコマ」「じんめ」「神馬」と称して，天災地変や神恩感謝のおりに，ぬさとともにウマを神前に供進し，また，雨ごいには黒馬，雨やみの祈りには白馬を献上するならわしが古くからあった。

天武天皇の大宝2（702）年には飛驒から，聖武天皇の天平3（731）年には甲斐から，同10年には信濃から，黒身白髪のウマを献上するなど，神馬供進の記録は多い。各地の神社仏閣に残る絵画や彫刻，『万葉集』や『古今集』に残る各地のウマにかかわる方言，それから郷土玩具のたぐいまで加えると，大陸から離れた島国ながら，日本に育ったウマは1000年以上の歴史をもっている。

南方系と北方系

20年ほど前のこと，鎌倉の材木座の発掘のおり，刀剣・甲冑・人骨にまじって，おびただしい数のウマの骨が出土し，整理にあたった長谷部博士が，当時の戦馬に大小の2系統があって，小格のウマは南方，大格のウマは北方由来のウマであると推定した。

現在残っている日本の在来種，トカラ馬と北海道和種とは，骨学的にみて由来が異なり，前者は東南アジア，中国の四川，雲南のウマと類似し，後者は蒙古，満州のウマに類似するものとの報告もあり，鎌倉時代のウマに南・北両系統の認められることと合わせて，興味深い。

鎌倉時代から江戸時代には，全国各地で牧馬が行なわれ，地方独特の駿馬を産していた。なかでも，田名部馬（青森），南部馬（岩手），三春馬（福島），甲斐馬（山梨），木曽馬（長野），飛驒馬（岐阜），肥後馬（熊本），薩摩馬（鹿児島）など，いずれも良馬のほまれ高かった。

江戸時代には伝馬の制度が設けられ，各藩には馬術教師も召しかかえられ，曲垣，大坪などの世界に誇る馬術家兼相馬家もあらわれた。

滅びゆく寸前

明治初年，洋種といわれるヨーロッパ，アメリカの改良種が輸入され，なかんずく，日清・日露の戦争を経験して，急速に軍馬の生産が盛んとなり，日本古来のウマは国をあげての改良増産で，たちまちのうちに洋種の血統でおきかえられていった。

1000年以上もの実績と伝統をもつ日本の在来種は，やがてほとんどその姿を消し，第二次大戦中の内地の保有馬数100万頭のうち，わずかに1パーセントのみが，北海道や木曽の山間部，南方の諸島に未改良のまま残されたにすぎなかった。今日では，わずか数百頭の北海道和種と，全国に四散した数十頭のトカラ馬（鹿児島県の吐噶喇列島産），200年以上も続いた宮崎県都井岬の放し飼いの御崎馬も，牧場を突きぬける自動車道路にすみかを分断されて行き場に迷い，やがて絶滅する運命を待っている。■



トカラ馬。世界的にも珍しい島嶼産のウマ

世界のおもなウマの品種

その国で固定された代表的なウマの品種名を国別にあげてみよう。アラブについては，シリア，イラン，エジプト，リビアなどで純粋に繁殖されているほか，少数ながら，サラブレッドとともに世界各国で飼養している。

イギリス：ニューフォレスト，ダートムーア，ウェールズ，シェトランドポニーなどの在来種を固定したもの。競走馬＝サラブレッド，軽輓馬＝ハクニー，クリーブランドベイ，重輓馬＝クライデスデール，サッフォーク。

フランス：乗馬＝アングロアラブ，軽輓馬＝半血トロッター，ノルマン，重輓馬＝アルデンナー，ペルシュロン，ブルトン，ブーロンネ。

ドイツ：乗馬＝トラケーナー，ハノーバー，オルデンブルク，重輓馬＝ラインランド，シューレスウィッヒ。

オーストリア：高等馬術馬＝リピッツァー，山岳駄馬＝ハーフリンガー。

ハンガリー：乗馬＝ギドラン，軽輓馬＝ノニウス，フリオゾー。

スイス：騎兵乗馬＝アインジードラー，乗輓両用馬＝フライベルガー。

イタリア：障害馬術馬＝サレルノ。

ベルギー：重輓馬＝ベルジアン。

ポーランド：コニク，ポーランドアラブ。

ノルウェー：未改良種＝フィヨード，軽輓馬＝デールトロッター。

ソ連：未改良種＝ゼマイトカ，乗馬＝ドン，ブジョニ，アカルテケ，軽輓馬＝オールロフトロッター，重輓馬＝ウラジミル。

アメリカ合衆国：乗馬＝コーターホース，サドルホース，テネシーウォーカー，ムスタング，ピント，アパルーサ，パロミノ，軽輓馬＝スタンダードブレッド。

ほかに，ヨーロッパから独特な持ち味のウマを輸入して，新しいタイプの品種をつくりあげ，アメリカ種として固定している。アメリカペルシュロン，アメリカベルジアン，アメリカハクニー，アメ

→ *

カラーページ注

〔注1〕 **第二次大戦後の日本のウマ飼養頭数の変遷。**

1946（昭和21）年	1,049,393頭
1950年	1,075,975頭
1955年	927,260頭
1960年	672,660頭
1965年	321,840頭
1969年	189,760頭

〔注2〕 **軽種 中間種 重種の3つに分ける方法**　日本ではアラブ，アングロアラブ，サラブレッドを軽種。アングロノルマン，ブルトンを中間種。ペルシュロンを重種としている。軍馬の生産が品種改良の主目的であった時代そのままの分け方であるが，現在も一般的に使われている。北海道和種，トカラ馬，木曽馬などは中間種に扱われている。

〔注3〕 **深い胸**　鬐甲の頂点から胸骨の下縁までの垂直な長さを胸深という。胸深が大きなものを深い胸といい，心臓や肺臓がよく発達していることを示す。

〔注4〕 **スプリンターとスティヤー**　短距離用のスプリンターに要求される距離は，1400メートルまでであり，長距離用のスティヤーは，2400メートルもしくはそれ以上を全力で走る。日本の天皇賞レースは3200メートルであるから，スティヤーの競走である。

〔注5〕 **アラブの血量25パーセント**　日本ではアラブ血量25パーセント以下のものを準サラブレッドと呼ぶ。日本の競馬のアラブ系競走に出場できるのは，アラブ血量25パーセント以上でなければならない。準サラブレッドはサラブレッド系の競走にしか出場できないので不利。

〔注6〕 **複尻**　複尻は，尻の筋肉が盛りあがって2つの山のようにみえる尻のことである。本文に出てくるこれらのことばは，いわゆる相馬〔ウマの体形の判断〕用語である。長い肩，短い背，高い尾つき，深い胸なども同じである。

〔注7〕 **ソリュトレ馬**　南フランスのロワール県ソリュトレの旧石器時代後期の遺跡に発見されているウマである。野生馬のプルツェワルスキーウマなどと近い関係にあるといわれている。

〔注8〕 **ラバ**　ラバは雄ロバと雌ウマとの雑種で，ケッティは雌ロバと雄ウマとの雑種である。ラバ，ケッティともに受胎の能力はない。

〔注9〕 **シェトランドポニー**　アメリカに大量に輸入されたこのポニーは，純粋繁殖の結果，原産地の粗野な性質を失い，被毛が短くなり，独特なアメリカシェトランドポニーとなって，子どもたちの人気を集めている。■　（野村晋一）

ヒグマと2人のイノシシ 39

暗く明るい夜

畑　正憲

女のイノシシが去った島の家は暗かった。僕は何をするのも億劫になって，立ち上がってローソクに火をつけるのも大儀だった。むろん，夕食も抜き，大好きなコーヒーも抜き。

膝にはどんべえ。

正座している僕の両のももの間に身を置いて，どんべえは無心に眠っていた。

ふっこ，ふっこ……。

荒い鼻息。

部屋はまったくの暗黒ではなかった。夕刻からつけたストーブがそのままになっていて，10秒か20秒置きに灯油が勢いよく燃え上がる時，火影が壁で踊っていた。だらしなく開けているどんべえの口元もよく見える。

長い眠りだ。すでに10時。日が沈んでから熟睡し始めたのだから，3時間ほど経っているだろうか。僕の足はとっくにしびれ，正常な感覚を失っていた。

——どんべえ。

僕は喉の奥で呟いて彼女の頭を撫でていた。もう，すっかり違和感がなくなった，硬い，なつかしい感触。

どんべえが寝返りを打った。

その拍子に膝の上から転げ落ちた。子グマと僕の体温とで蒸れたように熱くなっていたももが，急に冷んやりとして，僕は離していた両のももを閉じた。

板の間に落ちたどんべえは，前足を思いっきり伸ばし，薄目を開け，舌をするするっと出してあくびをした。それから慌てて僕の膝にすり寄って，右のももに手をかけ，またぐっすり寝込んでしまった。ふいごの音を思わせる寝息がときどき乱れるのは，熟睡している証拠でもある。どんべえは興奮している時の方が息が整うから不思議である。

僕はタバコに火をつけた。手を伸ばして，燃えているストーブを臨時の灰皿にした。どんべえは熱いという言葉を憶え，ストーブには手を出さないようになっていた。

どんべえがタバコの吸いがらを食べてしまうので，灰皿はしまいこまれ，柱にミルクの空かんが釘づけにされていた。これが灰皿の代わりである。従って僕たちは，立ってタバコを吸うしかなかった。空かんがクマ害を避ける高い位置に固定されていたからである。

が，妙なもので，タバコを吸うためにいちいち立ち上がっていたのでは，一服した気にならなかった。やはり，どっかりあぐらをかくか，ソファにでも坐って吸わねば，おいしくないのである。

僕は子グマに煙がかかるのを避け，タバコの赤い火を見つめながら胸いっぱい吸いこんだ。

吐く。白い煙の濃淡の間で，ストーブの火影がまたたいている。

静かだ。夏を迎えようとしている海は歌を忘れ，まるで湖水のように静まりかえっている。

どんべえを棒で殴ってしまったショックは，もう僕の心から消えていた。許してくれ，そう願う気持もない。

もっと荒々しい，だけどやさしい感情が胸の中に渦巻いていた。

無人の島ではあるが，今誰か玄関の戸を開けて入ってきたら，僕の目がけだものじみた光を放っているのにびっくりするだろうと考えたりしていた。どんべえを殴り，その直後にひしと抱きしめたことで，僕の中に何かが誕生していた。力強いもの，相手にのしかかるもの……いや，違う。

膝で眠るこいつを自分のものにしたという実感……いや，そうでもない。強いて言葉を捜すなら，僕自身の中にひそんでいた野性，それが突如として表面に出て来た感じだ。

と同時に，この島へ渡って以来のこだわりや苛立ちが消えとんだのも事実だっ



東の空にはなやかな色彩があふれ，畑さん，どんべえ，グルが，そのなかにとび出していく。島の夜明けだ

カラーページ解説

* ——→

リカクリーブランドベイ，アメリカシェトランドポニーなどがそれである。

カナダ：乗馬＝ポリスホース。

アルゼンチン　ブラジル　ペルー：乗馬＝クリオロ。

日本：乗馬＝アングロアラブ，サラブレッド，乗輓両用馬＝アングロノルマン，農用輓馬＝ブルトン，ペルシュロンなど。■

ウマの毛色とその遺伝因子

ウマに限ったことではなく，哺乳類すべてについていえるが，被毛の色は両親の毛色遺伝因子によって決まる。その因子に，主要な3種類があって，A因子，B因子，C因子と呼んでいる。

A因子：一般にウマの毛色は，黒一色とか，白一色といった簡単なものでなくウマ特有の毛色の模様がある。その強さを加減するのがこの因子で，A因子の活動が弱いと，未改良種にみられる色彩のきわだっていない毛色が出てくる。

B因子：黒い色素をつくる因子で，この因子の活動が弱いと，毛色は黒くならずに褐色となる。このときは劣性のｂ因子が関与しているとする。たとえば両親の一方が黒で，子どもに優性のB因子を与え，親のもう一方が褐色で子どもに劣性のｂ因子を与えると，子どもは Bb で被毛は黒色，いわゆる青毛になる。

C因子：被毛に何かの色を発色させる因子である。この因子が欠けているか，何かの原因で活動しなければ，アルビノ（白子）になって，白ウサギ，白ネズミのような白い色になる。ただしウマのアルビノは実在しないから，ウマはつねにC因子をもっていることになる。

毛色の発現について，遺伝因子の構成と被毛の色とを対照すると次のようになる。

遺伝因子型	毛　色
AA(Aa), BB(Bb), CC	鹿　毛
AA(Aa), bb, CC	栗　毛
aa, BB(Bb), CC	青　毛
aa, bb, CC	栗毛（赤褐色）

パロミノや河原毛のような薄い色調をだす，毛色を薄くする因子がある。これをD因子と呼ぶ。パロミノはD因子がDd というセットになってはいったときに美しい黄色になるが，DDのセットでは薄くなりすぎ，dd では濃い色となる。

栗毛やパロミノに白いたてがみと白い尾毛をだす特種な f 因子，アルビノではなくて優性の因子として白色の被毛をつくるW因子，色模様の基礎となる毛色に変異を起こさせる因子，頭や肢（あし）の先端に白斑をつくる因子，あるいは有色の因子に対して，つねに優性で，その色をおおい隠してしまう葦毛因子などがある。これらの因子を組み合わせていくと，ウマの毛色の遺伝因子構成はきわめて複雑になる。また，実際にその組み合わせは複雑である。■

た。僕はあまり神経質な男ではなく，これをやると宣言して成し遂げた仕事も多い。しかし今回ばかりは相手が相手だったから，身構えていないでもなかった。よい結果が出てから書くのなら気も楽だろうが，書きながら育て，育てながら書いている。その作業がどんべえと僕の間に微妙なすき間をつくり，僕の心労は倍加していた。僕は島へ渡るという行為で殻から出たつもりだったが，新しい殻をまとっていたのかも知れぬ。

それが割れたのだ。鳥のひなが卵歯で殻を叩き割るように。

暗いが明るい夜だった。

上川を去る時，僕は間見谷さんに約束した。

「娘として育てます」……と。

それから，咬まれ，かじられ，ひっかかれてここまでやってきた。その熱っぽい短い時間。一場の夢に似て，それにしてはあまりにもなまなましかった息苦しい緊張や感激の連続。

僕はため息をついた。

もう娘だなどと格好をつける必要はなかった。どんべえはいとおしい肉のかたまりであり，僕と一緒に生きてゆくしかないヒグマの子だった。そして，僕たちの間には，体温と体温が重なり合い，人っ子ひとりいない島で暖かく夜を過ごしている。それだけで十分じゃないか。

自分の性格が激しいことは，重々承知している。死ねとまで叫んで，渾身の力をこめて殴ったのもそのせいだ。

でもそれが何だ。

激怒もよろこびも僕自身の投影であり，他に生きようがないではないか。結果がどうなろうと，僕には僕の育て方しかない。自分を正直にクマにぶつけ，クマからお返しをいただくしかない。技術とか善悪とか，そういうものはもっと高い所にあるものだろう。ここには，人間と人間とでは経験し得ぬ丸裸の魂が転がっているだけだ。

僕は声に出して呟いた。

「どんべえ。いい子だぞ，お前は。かわいいぞ。かわいくって仕方がないぞ」

どうもいかぬ。涙もろくなっていけないや。畜生。

命を頂け，すがりついている子グマを眺めつつ僕は大粒の涙を流すのだった。

長い間思い続け，たどりついた1つの頂とも言えようか。それはまだ低い。低いけれど，低いが故の眺望だってある。

午前零時。

手洗いに立った僕は急に空腹を覚え，トマトジュースのかんを開け，ビスケットをかじり始めた。

「うまいぞ。お前も食べるか」

どんべえは返事の代わりにあくびをして，例の軟便をしてすり寄ってきた。

「よし，よし，待ってなよ」

僕は嚙み砕いて口移しでビスケットを与えた。

口の内側がはれて痛いのは，口移しで餌をやる際，タイミングがうまく合わぬ時があり，パクリと唇をやられるせいだ。面の皮が厚いので，外側は無事だが，口の裏側に犬歯が食いこんでいくつも穴が開いていた。だから，熱いミソ汁などすすると，とびあがるほどしみた。



ひざにもたれて無心に眠っていたどんべえは，寝返りをうった拍子に転げ落ちたが……

「さあ，食べろ」

ポリ，ポリ，ポリ。

「おいしいか」

ポリ，ポリ，ポリ。

「そろそろ下痢を卒業しろよ」

食べているのか食べさせているのか，自分でもわからなかった。口に入れて与え相手が一息ついたら呑みこんでいた。

その素晴らしい夜も3時半には白み始めていた。濃い藍色のカーテンが東の空でちょっと上がり，淡い緑のすき間が現われたと思うと，花やかな色彩がどっとあふれてきた。

まんじりともしなかった僕は，大きく背伸びをして言った。

「どんべえ，起きろよ，散歩だぞ」

引き綱をつけずに，僕は玄関の戸を大きく開け放したのだった。■

山路でのであい 3

兎を追う鼬



文とえ　串田孫一

島々谷は寂しい谷であった。私が徳本峠を最初に越えたのは昭和のはじめであったが，それ以後，山の行き帰りに，この峠を越えるために，島々谷を何度歩いたか知れない。その度に寂しい谷だと思った。

1960年の6月はじめ，すっかり便利になった上高地へ行く時に，久々に，この谷に夜ひとりで入って行った。暈をかぶった月の前を雲がしきりに流れ，その量は次第に増して行った。川音の向こうでジュウイチが鳴き，手前の繁みではコノハズクが鳴いた。いずれも豊かな声で鳴き続け，ひと休みしたかと思うと少し位置をかえて鳴いた。あるいは鳴き方が幾らか違うので，語りあっていたのかも知れない。

それはすべて，深い谷の暗闇の中での声であったが，私はずっとあかりをつけて歩いていたわけではなかった。道ばたの草にねころんで一ぷくしていると，却ってあかりのない方があたりの地形も分かり，目が闇になれて来る。私はなるべく懐中電燈を消して歩くようにしていた。

すると，歩いている道の先を時々横切るものがいた。草むらで音を立て，道を走っていってはまた草むらへ入ってしまう。

こういう場合に，大体の見当がついていても，何だろう？　と思う時と，大して根拠もないのに，鼬だろうと決めてかかってしまう時とがある。小柄の動物で，こちらへ向かって来そうもないと，鼬だろうと決めてしまえるが，多分あれは熊だろうと思って平気になっていられれば大したものである。島々の部落で食糧を少々買った時に，最近熊がよく出るから気をつけるようにと言われたことを想い出すと，道の曲がり角で先の見とおしがきかないようなところでは，もしやと思うことがあった。

充分に観察も出来ず，確かな根拠もないのに鼬と決めるのは，最も慎まなければならないことであるが，夜が明けてから間違いなく鼬を見た。

というのは，真夜中の谷の奥の，流れも細く一層水音のはげしくなったところで，道を見失って1時間ばかり藪と格闘をした。そしてやっと丸木橋を見つけて渡っている時に懐中電灯の球がきれ，渓流のわきに野宿をした。

3時間ほどよく眠ると，初夏の早い夜明けが来た。空はすっかり曇り，2時間後には雨になってしまったが，目をさましてしばらくぼんやりしている時に，兎が私の近くを，ただごとでない様子で駈けて行った。そのうしろ数メートル離れて，鼬が追いかけて来た。私は咄嗟に，その鼬にストップをかけた。兎を助けたいという一瞬にして起こった自分の気持を吟味することはむつかしい。分析を試みることがなんとなく恐ろしい。

兎の命は，ともかくその時は救われた。鼬は口惜しかったかも知れないが，案外諦めよく引き返して行った。だがそれ以後，この鼬が兎を追いかけるのをやめたとすれば，いかにも粗末な童話である。

私は降り出した雨に濡れながら，雪の残っている道を，徳本峠へと登って行った。■

（哲学者）



飼育自慢 8 タイラ

愛媛県立道後動物園

メキシコからアルゼンチンにいたるアメリカ大陸に分布する，イタチ科の動物である。

ふつう平原や森林地帯にすみつき，小齧歯類などを捕えて食糧にしている。他の動物に追われたときには木に登り，数十メートルもの距離を木から木へととび移るという。イタチ特有の悪臭とは別の，独特なにおいをもっている。

写真のタイラは，本園で12年間飼育している愛称「タイちゃん」。これがものすごい大食漢で，1日のえさの量は，ヒヨコ12～13匹，ムシイモ200グラム，リンゴ130グラム，牛乳180cc，そのほかに生卵など。

そのせいか，からだに似あわず睾丸が大きく，いつもブラブラさせており，ホルモンもまたおう盛である。

1959年4月に，ブラジル在住の愛媛県出身者から寄贈を受けたものだが，雄1頭では寂しかろうと思い，なぐさめてやろうと思うのだが，精悍獰猛でなかなか人になれない。

そうした欲求不満からか，1日じゅう獣舎の運動場を活発に走りまわり，疲れを知らないかのようでもある。それでもこの「タイちゃん」，寝ているときはからだを丸くして，後肢で頭をかかえるというかわいらしい姿勢。けっこうあいきょうもあるのだ。

体長は約50センチ，尾の長さは30センチぐらい，重さは8キロと小型だが，4本の足先には鋭いつめがあるので危険な動物である。■　（技術長　坂本秀之助）

仲間のひろば

アリの観察

4年生の夏休みが始まった日のことである。わたしは，あることから夏休みの宿題にアリの観察をしたくなった。そのあることというのは，昼間外に出たとき，ものすごいアリの行列に出会ったためである。

観察を始めるには，まずアリのすむ場所と名まえ，体長などを調べなければならない。

クロヤマアリというアリは，体長約9ミリで，日のあたるかわいた土に巣をつくる。また，アカヤマアリというアリは，北海道や本州の山地にすむアリで，これも土にすんでいる。トゲアリというアリは，体長約10ミリ，くさった木に巣をつくる。

まだいろいろあるが，次にアリの習性などを調べてみた。まず，土にすんでいるアリは，巣から出ると太陽のさす方角を覚え，帰りは巣から出たときと反対のほうに光を受けて巣にもどる。あまり役だたない目のかわりに，太陽の光を使ってきちんと巣にもどるその姿は，まるで伝書バトのようである。

食物を見つけるときにも，目はあまり働かない。触角で食物を見つける。また，アリの1ぴきが食物をさがしに出かけ，見つけて帰ってくると，触角と触角とをふれあって仲間に知らせる。このときのようすは，まるでけんかをしているみたいだが，食物の発見を報告しているのだということだ。

このように，アリにもちゃんとしたアリの世界があることを，わたしたちは忘れてはいけないと思う。というのは，アリもまたわたしたちと同じように，この世にすむ生きものであるのだから。■

（福井市・松田香・11歳・小学生）

ペット相談室



〈問〉　雌ネコの避妊には，どんな方法がありますか。経口避妊薬の効果はどうでしょうか。

（各務原市・木戸脇房子・46歳・主婦）

〈答〉　ネコでもイヌでも，永久的避妊法を求めるなら，手術して卵巣と子宮とを切除してしまう以外にありません。避妊手術には，卵巣だけを切除する方法と，卵巣と子宮を切除する方法とが代表的なものです。ともに卵巣を取り去り，卵子の出る根源をなくしてしまうわけです。卵巣からは各種の性ホルモンが分泌されますが，これを取ると，そのホルモンの分泌がなくなり，いわゆるホルモンの脱落症状が起こることは避けられません。

しかし，人間のように強い脱落症状はなく，ほとんど外部に表われませんので，この方法が一般に認められ，また，確実な避妊方法だと思われます。ただ卵巣のみを切除する方法は，じょうずに完全に切除しないと，ほんの一部分でも残っていると，1,2か月で卵巣はもとの大きさに再生し，働きも以前と同じにもどります。卵巣切除手術をしたのに子どもができたという例はたくさんありますが，これは，卵巣を完全に取らなかったためです。また，卵巣を完全に取り去っても，子宮が残っていると，他からのホルモンの働きで，子宮は今までと同じように働いて，時期がくると，以前と同じように，ネコが発情のようなようすを示すことがときどきあります。と同時に子宮の内膜炎とか，子宮蓄膿症とかの疾病にかかるものも多くみられます。

卵巣と子宮とを同時に切除すると，こんな心配はなくなります。卵巣を完全に取るのも容易ですから，取り残しの心配もありません。手術はあまり危険ではなく，10分くらいで終わります。ただ，麻酔が強すぎると危険ですが，これは他の手術のときと同じことです。傷口は1,2センチで，ヘソの下を1か所あけるのですが，5日くらいでふさがります。

手術による副作用は，ホルモンの脱落症状以外にはありません。それも個体の差はあっても，とくに問題になるようなものではなく，多少太るくらいです。皮膚病になりやすいといわれますが，これはもともと，皮膚炎とか湿疹を起こしていたネコが，手術のために多少起こしやすくなったものです。毎年3,4回発情して，いろいろな病気をもらってきたり，妊娠して子ネコをむやみに生みふやし，自分のからだも衰えさせることにくらべれば，問題にはならないでしょう。手術の時期は1歳前後が適当のようです。

元来ネコは，交尾の刺激で排卵し，受胎する動物です。発情のときに，人工的に交尾と同じ刺激を与えると，排卵を起こし，そのまま発情も終わります。しかし，この方法は，その時期の判定，刺激の技術的問題などがあって実行困難です。また，2,3か月おきに発情がくるので，そのたびに心配しなければならず，技術的にも確実性は薄くなります。

経口避妊薬は，その内服時期を正確に，適期にすれば有効です。ただ，その時期の決定とか，内服のわずらわしさとか，1回でも忘れたら効果が疑わしくなるとかの点で，実行はむずかしくなります。ネコの経口避妊薬は，まだ日本では発売されていませんし，副作用の点でも疑問が多く，おすすめできません。

ある種の合成女性ホルモンを多量に注射することによって，卵巣の機能を一時的に弱らせ，発情をなくしてしまう方法が，イヌに応用されたことがありますが，一定時期を経ると，またもとにかえるということです。これもその確実性において，また副作用の点で問題が多く，ネコに対してはとくに作用が不安定なため，実用には供せられそうもありません。まだまだ研究の途上にある避妊方法だといえましょう。■

（動物愛護協会附属動物病院院長）

裏表紙説明

輓馬　かなり重い荷馬車を引くことができる，ヨーロッパの輓馬である。2頭立てというのは，日本ではあまりお目にかからなかったから珍しいし，また，荷馬車と結ぶ首輪もがっちりしていてりっぱである。

右はボスチェブルトン，左はノール輓馬である。いかにもそのからだから力強さを感じさせる。

倒れた輓馬を打ちすえる，といった話がある。疲れ切ったウマを歩かせる虐待は問題である。しかし，動物愛護という名のもとに，ウマから馬車をとりあげてしまうことも問題であろう。輓馬はそのために，それだけの強さをもちつづけてきたのだし，もし何もさせなかったら，このウマの強さはやがて消えてしまう。

ウマが，みんな競馬場でみるウマのようにスマートだということは，ウマの能力のためにも不幸である。重々しく，たくましいウマもいることが，ウマのためにいいのだと思う。■ Ph. W. Lummer

ギャラリー

牧馬図屏風

長谷川信春



紙本着色
六曲一双(右双部分)
157.6 × 341.4 センチ
東京国立博物館蔵

馬は、日本では武家ともっとも密接な関係があったので、室町時代から江戸時代の間に、武家風俗画の画題として、多くの絵に描かれた。厩図、調馬図、牧馬図などがそれである。そのなかの牧馬図とは、放牧の馬の群に、武士たち馬丁たちを加えて描いた絵を指すが、馬ばかりのものもある。この長谷川信春の屏風画は、牧馬図の代表的な作例である。

長谷川信春は、桃山画壇の天才長谷川等伯の青年時代の名であった。天文8(1539)年、能登七尾に生まれた信春は、大和絵や漢画の技法を習得して、若くしてすでに、仏画、山水画、人物画、花鳥画、肖像画のすべての分野に活躍していた。のちに京へ上って等伯と改め、旺盛な制作を行なう才能は、信春時代から誰の目にも明らかだったのである。

この絵も、その時期のすぐれた作品のひとつで、六曲一双に、20数頭の馬と調練する武士や馬丁をとび回らせている。20歳台の若い信春の筆は、いくぶんの固さを脱しきれないが、馬や人物の描写ははつらつとしており、清新な感覚による表現と美しい彩色は、数多い馬の絵のなかでも特色にあふれた画面を作りあげている。戦国の世からまだ年を経ぬこの時代の武家たちは、こうした屏風を邸で用いて、練武の心を忘れぬようにつとめたのであろう ■

(水尾比呂志)



締切り迫る!!

朝日＝ラルース「世界動物百科」では、ただいま〈愛育の記〉を募集しております。
ペットの自慢話や動物との心あたたまるお話などをお寄せください。400字詰原稿用紙で30枚以内。もちろん動物の種類は問いません。締切りは12月31日必着です。詳細は〒100東京都千代田区有楽町2の3 朝日新聞社出版業務部「世界動物百科」〈愛育の記〉係 ☎東京03(212)0131へお問合せください。募集要項を用意してあります。お早目にご請求ください。

世界動物百科 通巻41号 昭和46年12月19日発行(毎日曜日発行) 編集・発行人 大田信男 発行所 朝日新聞社 東京 大阪 北九州 名古屋 印刷・凸版印刷 定価220円



30ページ

雑誌 0683-12 10